西國三十三所名所圖會 四

西國三十三所名所圖會巻之三目錄

自田邊渡湯崎

磯間浦　形見浦　神楽島　呼上関古跡
風莫濱　綱不知　江面浦　盛長祠　権現山
御船谷　眼鏡石　白良濱　鉱山浦
温泉　摩撫湯　濱湯　え湯　館湯　崎湯　新湯　阿和湯　疝氣湯　眼目湯
薬王堂　御幸芝　千畳石　時雨松
龍門石　湯崎温泉碑　庚申山　庚申塚　龍口巖
仆候樓　以上湯崎近邊の名所　自是以下田辺より紀三井寺街道　出立王子社　平草原
洲嵜　磯馴松　阿古屋島　御腰掛石　御所谷
潮垢離橋　天神鼻　蘓生山　潮垢離濱
牛ケ鼻　芳養王子社　袖摺石　斉田橋
鹿嶋　南部浦　御茶屋跡　高野坂
南部川

内閣文庫

千里濱　観音堂　千里二子社
岩代王子社　岩代清水　庄倉嶺　岩代森
岩代結松　岩代岡　鵜藪　岩代濱
柳水　榎峠　岩代尾上　岩代岸
切目川　御所畑　御手掛松　中山王子社
光川　冨王子社　印南浦　切目山
叶王子社　上野浦　上野王子社　御所平
清姫草履墳　袈裟掛松　十三墳墓　低語橋
塩屋峠　王子川　塩屋王子社　観音堂
塩屋浦　同里　鰹嶋　比井水崎　御所芝
丸山古城跡　徳本上人剃髪地　財王子社　日高川
八幡山　天音山道成寺　本堂　阿弥陀堂　三重塔　鐘楼古跡　海士王子社
清姫蛇墳　大山権現社　安珠塚　富安王子社　同行宮　高家王子社

槌王子社　新熊野　鍵掛王子社
法華壇　鹿背山　津之瀬王子社
河瀬川　稲荷社　井関川
久米崎王子社　廣川　狭島
湯浅川　芥磨島　顕國社
葉宇津峠　逆川　逆川王子社
糸鹿嶺　糸鹿里　上王子社
水王子社　稲荷神社　有田川
御茶屋芝　宮原八幡宮　山口王子社
瓜書尊像　嶺王子社　獄山
所坂王子社　橘本王子社　入佐山
藤白山　地蔵峯寺　嶺王子社
金岡筆捨松　硯石　藤代岳　中道寺
馬留王子社　藤白王子社
沓掛王子社
津兼王子社
廣八幡宮
鷹嶋
秡井
雲雀山
得生寺
蕪坂
市坪王子社
福勝寺
御所芝

鉾三郎重家宅　義経の掛松
抜所王子社　浄土寺　鉾亀井碑　山名義理碑
岐神社　藤白浦
三上山　日方川
黒江椀　黒牛潟
服部川　鎮座石
名草濱
第二番紀三井山護國院　本堂　如意輪堂　鐘撞　開山堂　経塚　二重堂　鎮守社　金毘羅堂　大師堂　扎納堂
三瀑布　常行堂　二王門　禁石　地蔵堂　鷹同樹　千手谷　龍燈松　宗紙坂
摂社　末社　神楽殿　御腰掛石　御供所　御厩
名草山　明見社
日前宮　正殿　國懸宮　摂社　末社　宮中諸殿　大鳥居　反橋　飛山　神畔
櫛束松　塩竈
以上二番より三番への順路なり
以下二番より和歌浦へ渡海の道すじ
観海樓　経王堂　妹背山　尋寶塔　唐門　瑞門　自然石　階擅
岩窟祠　禊洗石　二断橋　芦辺茶屋
玉津嶋神社　本社　拝殿　神楽殿　宝庫　岩根薄　御供所　御供井
亀井六郎旧宅趾　一鳥居旧趾
亀井泉　柳井
名高浦　糺神社
干潟浦　黒江坂
古城跡　琴浦　菰池
濱宮　本宮　国懸宮
名草浦　布引松

玉出島　龍山
和歌御宮　本宮　拝殿　唐門　神楽殿　摂門　護摩堂　三重塔　薬師堂　開山堂　摂社　末社　御腰掛　下馬橋　下馬橋　石鳥居
天満宮　和哥浦　大相院　千畳敷趾　和歌松泉
芦辺浦　行幸芦　望海樓遺跡　養珠寺　妙見堂
雑賀城趾　五百羅漢禅寺　秋葉権現社　亀遊巌
鶴立島　愛宕山　吹上濱　根上松
和歌山　田井瀬渡　川邊王子社　御船神社
根来寺　本堂　大塔　光明會道場　求聞持堂　大門　天真橋　護摩堂　御影堂　三部権現社　鍾鑽不動堂　弥陀佛古碑
石手渡　岩手里　岩手驛　岩手大宮　本社　末社
本地堂　玉塚　厠迦井　稲荷社
人馬谷　春日神社　本社　末社　若宮　神取池　納涼森
岩田八郎墓　金剛寺　秀郷碑
延命寺　観音寺　本堂　三層塔　阿弥陀堂　鎮寺社　鐘撞　居栄松　撞門　木堂　仏像堂　六角堂　行者堂　鎮守堂　阿弥陀堂　奥薬師　剛迦井　鐘撞　丈六堂　春日山城趾　和田城趾
第三番補陀洛山粉川寺

地蔵堂　湯殿桜　参籠所　交掛桜　御供所　中門　蓮盤　太子堂　三社　出現池　中島堂
三角堂　馬蹄石　常念仏堂　重男堂　揚抑井　地蔵堂　不動堂　経蔵　羅漢堂　稲荷社
大門　念仏堂　大門橋　蛭子社

猿岡山　風猛山　杉川町
神明宮　御旅所
玉垣勾頓宮　鎌垣行宮跡　御所芝
祇王舞田　高野辻　高野廻道法
名手新蔵人城堤　宇野城堤　名手神社　穴伏川
妹背山　妹背川　舟岡山　四十八瀬川
三尾神社　十六勢墳　萩堂　脚休観音
七越嶺　天王池行場　金剛童子祠　三國嶽行所
釼池行所　雨壺行所

和泉國

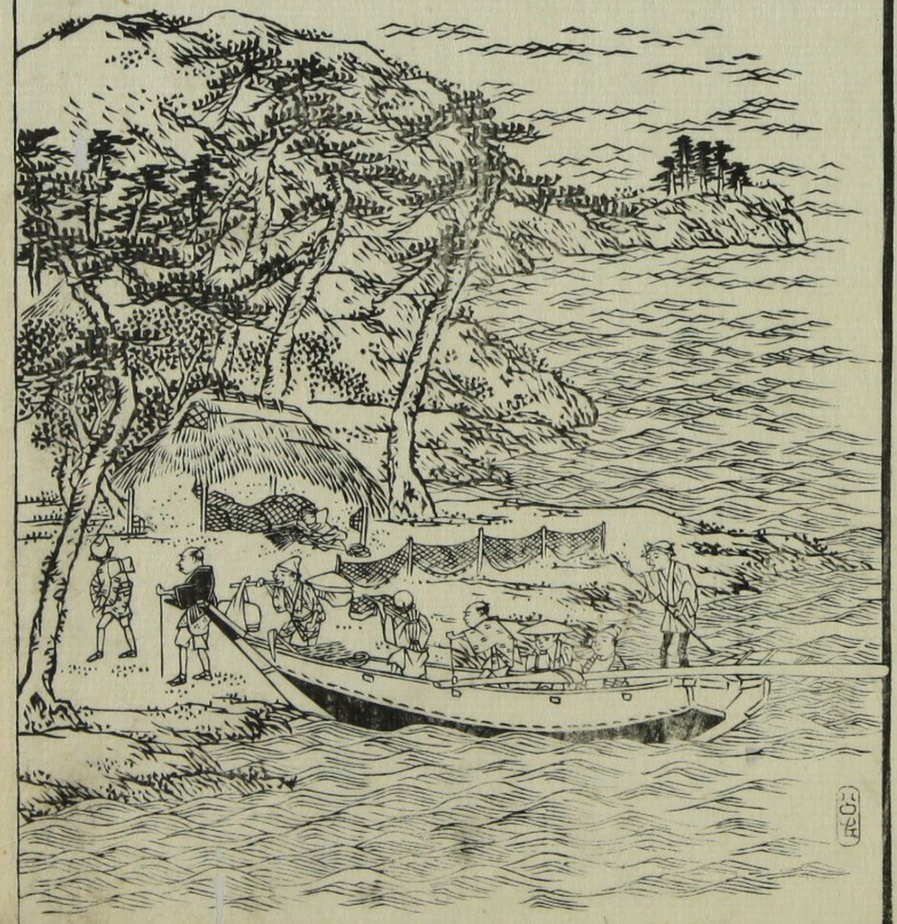
國號之譯

光瀧寺　本堂　子宝塔遺蹟　炭焼不動堂　什宝　名産白炭
光之瀧

此地ハ河内国ニ属ス

江面浦船着

湯浦の温泉ハ
ゑゑ八四ゑの
度ゑゑ日毎ホ
通船ゆゑて
ち使ゑゑゑ
自由ちゑ
凡八海の形状
一里ゑゑゑ
ゑゑゑ一村の
男ゑ江面浦ゑ
ゑゑ八ゑ
湯浦村ゑで
ま里ホたゑ



磯間浦 田辺の庄神子濱村の西南二丁ばかり

建保百首

神島や磯間の浦に海士のつる藻刈ひろひ乃身を恨つ　順徳院

玉吟

夕潮のみてぞ行る神島の磯間の浦ゝ袖のぬれぬる　家隆

万葉

月余美能比可里乎伎欲義神島乃伊素末乃宇良由船出須和禮波

紀路哥枕抄名勝畧誌ニ此地ハ然ル畧解ハ備中国ニもくべト云是非ともくべ

形見浦 磯間の浦ゝ続く **神楽島** 俗ニくべの **呼上開古跡** 新庄村の西北ニあり

風莫濱 田辺ゝ瀬戸の間ニあり此海と土人綱もくべゝと山陰の入江にて難風の時ゝこの浦ゝ漕入れめもゞ碇と下さゞ綱ゝもくべ是ゝよりて名づくゝ云凡て此所風のかぜゝ浦ゝ風なゞト云

萬葉

風莫乃濱之白浪徒於斯依久流見人無　長孝意吉歴

江面ノ浦 瀬戸の内ゝあり田辺ゝ海上一里南ゝ此地ハ田辺ゝ瀬戸湯崎ニ〆の通船の舟着ゝ

田辺ゝ湯崎の温泉ゝ浴んと欲ゝバ田辺の濱ゝ日毎ゝ通船ありて一時ゝ間ゝ

ゝ渡せり是ゝ陸ゝ上ゝて凡十丁ばかりにして湯崎温泉の地ゝ至る船路凡一里

又陸路ゝて往んゝハ田辺ゝ東ゝ廻り新庄跡の浦ゝ鳥の栖堅田ニと経て綱不知

出ゝ大ゝ當江面ゝ来ゝ瀬戸ゝ廻りて湯崎ゝ至る行程凡二里海陸ハ所謂弓ゝ絃の如

藤九郎盛長祠 瀬戸村ゝあり江面ゝ二丁余り行て瀬戸の村中ゝ右の方ゝ二丁余入

安達藤九郎盛長の霊と祭る霊験いちじるしゝ云　神主　四郎太夫

本社　盛長霊神 自作の木像と祭る

盛長之墳　神主の境内ゝあり

盛長所持湧度　神主四郎大夫蔵之

社記曰　當社ハ天兒屋根命の神孫大織冠鎌足公の嫡孫大政大臣藤名公

五代の後裔山蔭民部卿四男上野介相継ゝ四代小野四郎兼廣乃嫡男

安達藤九郎盛長の霊神と崇祀る所ゝ抑人王五十二代清和天皇の後裔

征夷大將軍源頼朝公いまゝ兵衛佐ゝ時平治元年豆州蛭ヶ小嶋ゝ遠流

せられ其砌ゝて安達藤九郎盛長ハ佐殿ゝ随身ゝ石橋山の合戦と始め

數度戦場ゝ軍功ありゝ世武勇の剛(最高)ゝ然るに治世て後説者の舌頭ゝ

罪ゝ無実の罪と蒙ゝ紀州瀬戸の浦ゝ配流せらるゝ数年の勤功に

ゝて嫡男景盛ゝ本領安堵の御教書と賜る依ゝ盛長ハ瀬戸の浦ゝ来て

経のひ其後富田の庄川村ゝ遊びの山ゝ不図も病ゝ犯され既ゝ危ゝ

瀬戸の浦ゝ帰りのひ終ゝ正治二年霜月十三日ゝ卒ス即あゝ葬ゝ霊社と此ゝ

営む者ども霊神無実の罪の難況除き海上安全を護ゝせのひ日〳〵霊験ゆ〳〵
ある事挙て数ふゝ遑けゝ且盛長存世の間鈎を垂のひ所今尚此磯に舩を繫
事と禁じの山縊つゝ舩とまれば忽ち神霊の怒りと蒙る事甚〳〵
庄川村の古跡と藤九郎谷と呂小祠と営む此ゝ大木ゆ〳〵然るに明和七年寅正月拙
夫昆と伐るゞ忽一天かさ曇り雷雨ときゝて山立も崩るゞ〳〵其後種〳〵奇瑞有て
終に神木と抱ゝ徒多く煩ひ或ゝ死るも有ゝゞ尚禾安くゝ霊験紀に出せバ畧之

權現山 瀬戸村ゆ〳〵権現の社と建

御船谷 山の背ゆ〳〵往古帝幸の時御舟と着せる〳〵古跡上云

白良ノ濱 瀬戸村ゆ〳〵湯嵜村ゆ〳〵間ゆ〳〵此濱の砂

眼鏡岩 瀬戸ゆ〳〵岩の正中ゝ穴有背ゝ西穴ゆ〳〵端も有ゝゞ崩れてもゆ〳〵

家集

堀川百

たゝ代の数もたゝん紀国乃名所名所濱ゝ法めるまゝ絵を　兼盛

夫水

ゆ〳〵ゝてもまゝゞ塩ゝてもゆゝゞ白良ゝ濱月夜月新　源宗長

建仁元年十月熊野御幸之時藤原王子社和哥會　題濱月似雪　仲実

鉛山七境詩　銀沙歩

在浦東北口有七礦山一峯只白沙
望之如鎔銀山下一帯細沙如雪
一望銀沙地　海潮洗更白　秋霜長不消
夏雪亦盈尺　不見眠鴎鳥　唯看數篆跡

鉛山浦 湯嵜の浦ゝも白良の濱ゝゞ不坂ゆ〳〵是とのがれば湯嵜ゝて入湯人乃宿屋多〳〵其余高家僧師の家ゝ洋ゝて家造ゝ四時ゝも入湯の人間断ゝ
あゝゝゝて繁昌の地ゝ湯の場所数多ゆ〳〵もの〳〵基功績ゝゝゝ天皇御幸もゝゝ世紀年数の温湯ゝゝゝ此地あゝゝゞ頗ゞ風景の勝地あり

鉛山七境詩　鉛山浦　祇洹源瑜

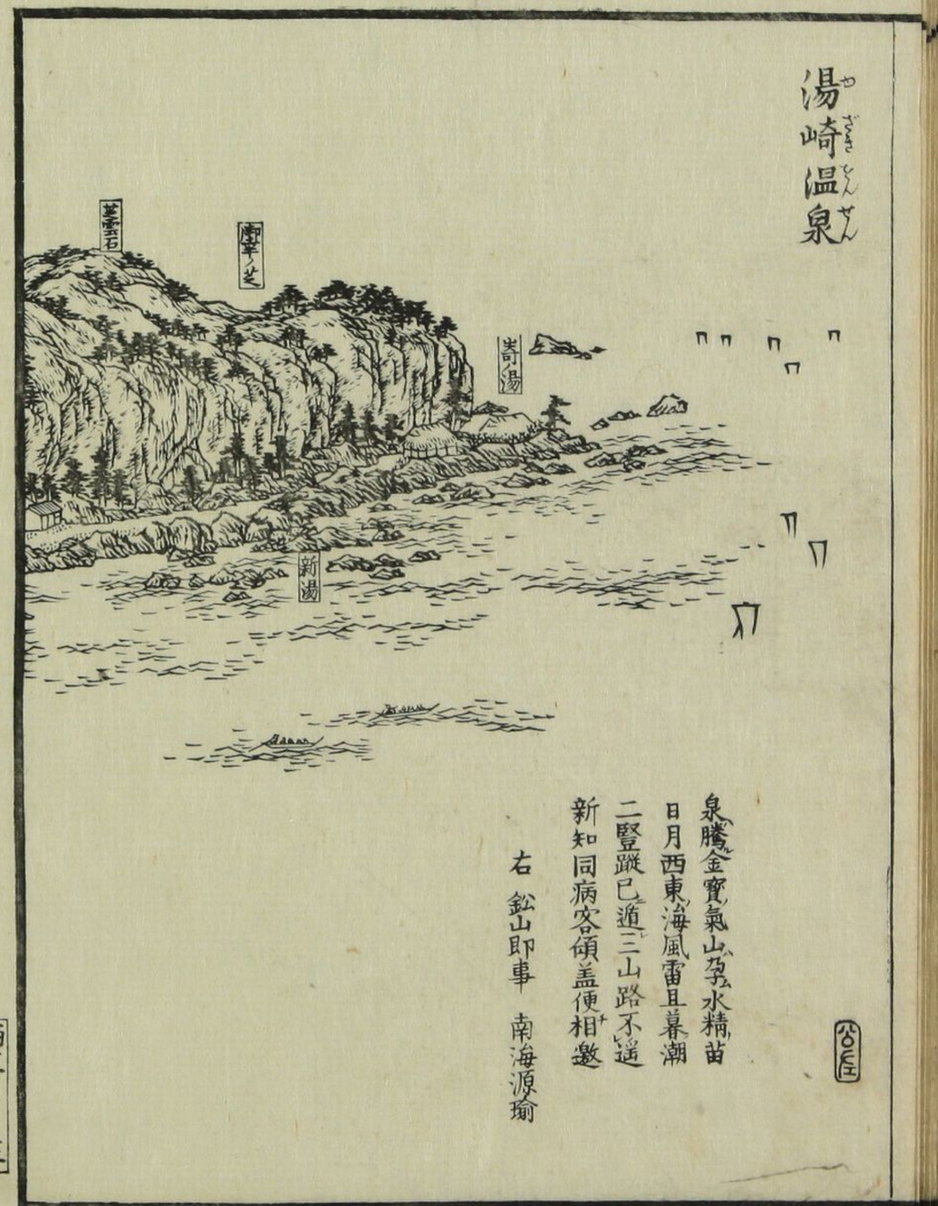
鉛山之浦何蟺蜒　金宝精華不後天　自古青州俱縁石
干今赤岸接銀川　巖々舊礦穿丹穴　歩々暄泉吐鉛炯
借問年々来沿者　何人為遇騎羊仙

摩撫湯 又間鼠湯ゝも書ゝゝ村中の入口ゝゝ有湯屋　折行凡四間半余　梁行凡二間余内ゝゝて有て湯ゝゝ湯壺二所ゝゝ湯壺長八尺余中五尺六寸許　深四尺余両所ゝも木ゝ以て圍む　底ハ石

濱之湯 まゝの湯ゝゝ小坂ゝゝゝ濱の方ゝゆ〳〵湯屋凡二間四方
湯壺凡長六尺許　巾五尺許　深三尺余　木ゝ以て圍む　底ハ石ゝ敷ゝゝ

元々湯 濱の湯の向ゝ通の左傍ゝゆ〳〵湯屋二間余四方
湯壺凡一間四方岩ゝゝゝ造る　深三尺余

湯崎温泉



泉騰金寶氣山孕水精苗
日月西東海風雷且暮潮
二豎蹤已遁三山路不遥
新知同病客頻盖便相邀

右 鉱山即事　南海源瑜

其二

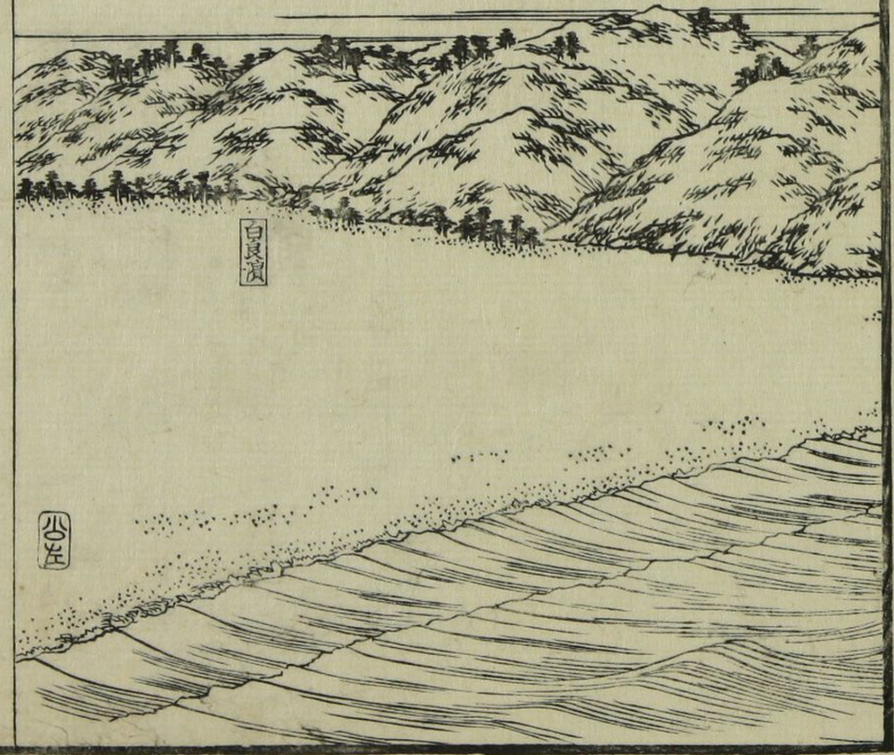
白良濱

坂路の勾碑ニ曰
月こゝのや
ちこゝの渡こ
馬二ノ羽
蜆辛

鉛山八勝詩

天晴津口海風
収浪洗清砂雪
色浮吟歩直馳
千里目更疑瓊
玉凝磯頭

彷門躍龍



館之湯 元の湯の先道の五山の方にいく湯屋 桁行二間 梁行二間又一間休息所と建添る 湯壺凡長五尺六寸四方 深凡四尺余 周ハ木を以て圍ひ底ハ石を覆ふ 軒前長サ五間 妻の巾二間 古哥に涙のくもりの湯壺とあるハ是なるべし

崎之湯 人永と称れ一丁余り海岸にいく艘石ものづゝ湯壺とあるを上に葦葺の屋根と 湯壺の長サ凡二丈五尺許 巾九尺或五尺 又三尺余の所も有て岩の出入多く又深さも凡四尺或八尺余又一尺余も有て其形容大概人の坐したるに彷彿たり俗に薬師の像なりと云

鉛山七境詩　金液泉

境多湯泉各有名　臨礦泉碕泉尤清澄可人
天地有供炉　金宝揚其精　萬古石巖曲
飛々清且鳴　非翅起吾痾　併茲濯塵纓

祇洹源瑜

時雨松 崎の湯の傍にあり枝葉こゝに露ちゝて常に樹下をひたす故に号く

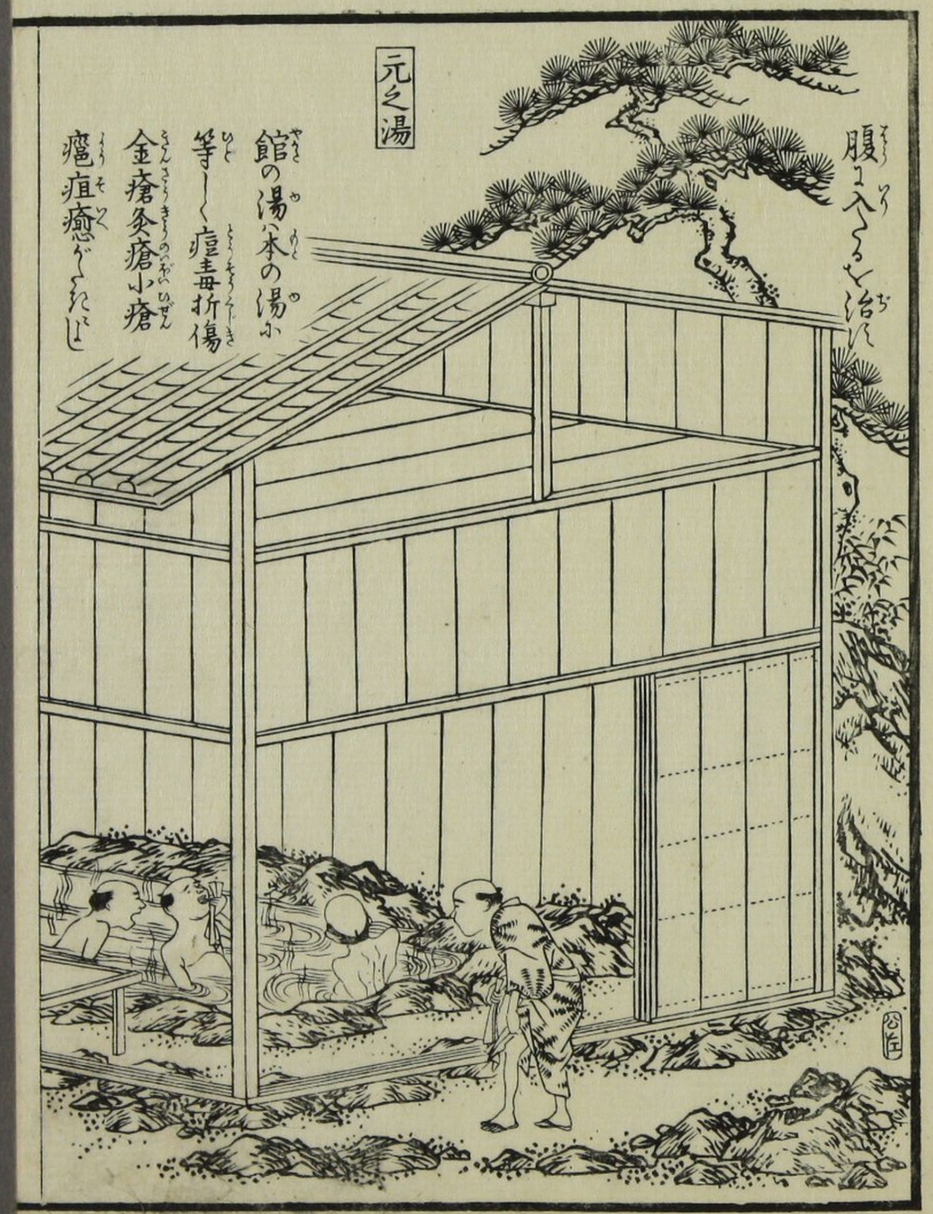
新湯 崎の湯にゝ半丁許此方往来の右磯辺にいく屋根覆ひる一俗に邪人湯と云 湯壺凡一間四方 深サ二尺余 石を積てゐまと作る

阿和湯 館の湯の下往来の傍にいく穴の湯にも云形ち四角石にて作る 径凡二尺許 深サ一尺余 覆ひ蓋 脚気 頭痛 眩暈 ちゞれ目を治ずるに

疝氣湯 崎の湯の傍磯辺にいく湯壺長凡四尺余 巾凡二尺許 深サ二尺余 覆ひ蓋 疝積 著浴して即効ありと云

眼目湯 摩無の湯の北岩窟の前にいく石の窪に所にゝ湧出る眼を浸して効ありやゝ目に即効ありぞ

主治 本の湯ハ陽中の陰にして癩病。痼疾。下疳。瘡毒。疱毒。膿瘡の類ひるひ。瘡血。



或ハ小児の胎毒諸瘡ニ〻但ー腹張痞〻積聚水種ニハ悪ー大食後食傷
後ニハ浴もぐ〻べ姙娠の婦人度〻浴もハ宜ーかゝべ
間阜の湯ハ性温和ニて諸風筋骨率縮手脚麻痺痿或ハ疥癬諸病皮膚
骨筋ニいると治ス
濱の湯ハ間阜ハ等〻少異あり小瘡初發或ハ痞滿積聚中風疥血折傷胸痛
肩痛痛風諸痔脱肛ニ治ス但發生甚ーハ故虚人ハ筋脉ニ損ずる事いり度〻ハ
浴もぐ〻べ○崎の湯ハ陽中の陽ニ諸痔或ハ麻病或ハ七疝脹滿背張腰痛下
血脚氣婦人の帶下ニ治ス但虚人小児宜ーかゝべ〻〻 南紀武田氏著 温泉主治出

藥王堂

館の湯の上の山ニいり瑠璃光佛を安置の〻林を藥王林ニいゝ安置の行基作ニ云慶長年間来迎寺開山ト誉上人

鉛山七境詩　藥王林　祇洹源瑜

在濱泉之上茂林森蔚有藥王堂
緑蘿廻磴道　碧樹与天舟　欝々成青蓋
林中好倚藜　烟雨四五月　子規時一啼

御幸之芝

崎の湯の上山の方ニいり往昔白河帝此温泉ニ浴ー〻ハ時行宮を營ー〻所ニ〻

鉛山七境詩　行宮趾　祇洹源瑜

在碕泉上相傳　白河帝嘗浴ス留輦處
憶昔温泉土　行宮有古臺　絃管空松韻
王甃唯石苔　泉邑猶望幸　翠華帰去来

千畳磐

西南の海岸ニいり千畳ノ如ク數十丈の大盤石ー〻て其形恰雲の如ク靈芝の〻〻南海先生ハれと芝雲石ニ号ー〻奇觀双びなし

鉛山七境詩　芝雲石　祇洹源瑜

在浦西南磯頭形如芝亦似雲俗謂之千畳岩
磯頭一片石　万人可以居　芝雲相襞積
五色拂芙蕖　不知女媧氏　非是補天餘

温泉夢現論曰磯山の景色ハ面白ク千畳敷と名づけ我〻ハ山上遊〻ハ平野ニて四國九國の山〻まで一眼ニ見ハ滿船載得山陰雪ニ〻ハ千念集曰夜萬感盈朝昏攀崖眺石鏡牽乗入松門もん風雅の遊客ハ好未ほも

更也之〜　此書ハ南紀式田氏の撰とする所ゝて温泉の論とゝゞめ主治甚忌ホナて本草〜

龍口巖　千畳岩の西さゝら〜長くものぶ故暑之いゝへせり長くものぶ如き巨巖あり其形龍の口と開くぶ如き巨巖あり其頷としてゞさ下の入こゝゝる事深くてゝゝゝ窟ゝて雨とものぐゞさ岩窟あり

鉛山七境詩　龍口巖　　祇洹源瑜

在芝雲石西形狀若龍首張口而閑頷下凹処可以避雨

昔聞飲龍川　今看龍口巖　鴉首呑滄海

明月吐復銜　泥蟠海雲崖　長鯨莫相餌

龍門石　館の湯の下森氏の庭前にあり恰も壁と立ちるぶ如き磐石にして石面に瀧と昇まる鯉のぐゞ形ちものぐゞ〜けるれあり

湯埼温泉碑　村中金徳寺の門前にあり碑石の高サ凡五尺五寸　巾凡二尺　臺石凡八寸余尚下に天保年間に建る所にて碑文仁井田氏の撰なり　自然石の臺なり

湯埼温泉碑文

海内温泉不可勝數其最顕於古者莫先於豫之熟田津摂之有間紀之辛湯々々温泉頗多其有名者二焉曰湯埼曰湯峯古史所紀之言紀温湯不外其地故世或疑焉書紀　齊明天皇四年冬十月　帝幸紀温湯是有間王子来浴辛湯温湯歸奏曰其地勝絶縦渉其境病自蠲消

帝聞之南巡之意決矣　帝之幸也　皇太子亦従焉此即　天智帝也

又書紀　持統天皇四年九月　天皇幸紀伊又續紀　文武天皇大寶

元年九月　太上天皇幸紀伊國冬十月　車駕至武湯温泉蓋此時二

聖相偕幸焉則持統帝乃併前両回萬葉集所載亦足以徴矣然則此地

温泉之美海嶽勝所稱於古者其將美疑今村中相傳稱御船谷御幸芝

者臨幸之遺蹤云蓋茲地横出於瀛海之中偃蹇蟠屈如臥龍奔蛇北與

田邊城相對面勢海湾々大十有余里其間蒼顔秀壁之削立曲浦長洲

之聯亘漁村之点綴島嶼之碁散異態詭狀不可縛形憑高望之恍如入

仙都其遠望則峨嶽疊峯濃淡分彩聳拔於雲表大瀛万里渺無際涯賈

帆商舶往来出没於風濤雲烟之中者一挙目而足矣誠海南之壮觀也

有間王蠲病之言不虚矣今温湯可浴者五焉曰元湯屋形湯濱湯埼湯

摩撫湯古老相傳元湯最舊古所用信矣余聞之醫曰温泉説本草以下

皆未盡獨稲若水香太仲所論確當其言曰凡地有火脉有水脉相交則

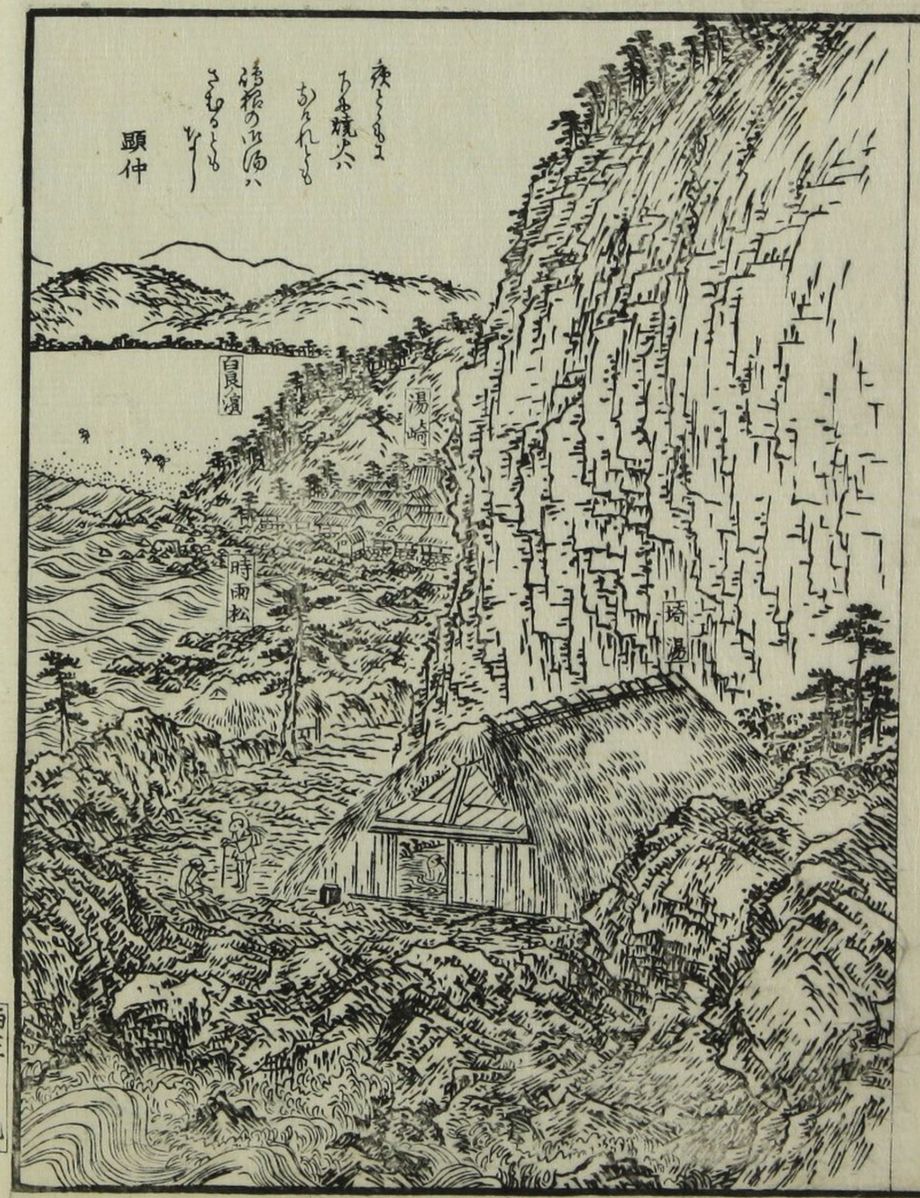
成温泉其性極熱觸物則寛又曰温泉必生硫黄蓋熱泉之淬也按茲地
故稱鉛山以地出鉛也鉛之為性甘寒無毒極熱觸之相和調適可浴且
無硫黄氣者其由斯耶夫物之峻烈取効雖速其害亦多其唯温柔和熱
足以奏功無有後害所以為貴也昔時　聖駕相繼臨幸得兆為此耶若
乃助氣温體通壅滯利関節解結蠲痼愈瘡諸如此類皆此湯所驗而甲
方来浴者夫人宜自得焉矧有倚伏秀絶之觀交相輔以蠲病如有聞王
所祈乎余奉　命巡省此地邑老請曰吾邑温泉貴於天下最顕古願記
其事以勒来浴者有徴焉於是書以彫之石金紫光禄太夫清原宣明郷題額
天保三年壬辰孟冬　　仁井田好古撰一甫撰并書

碑文和解云

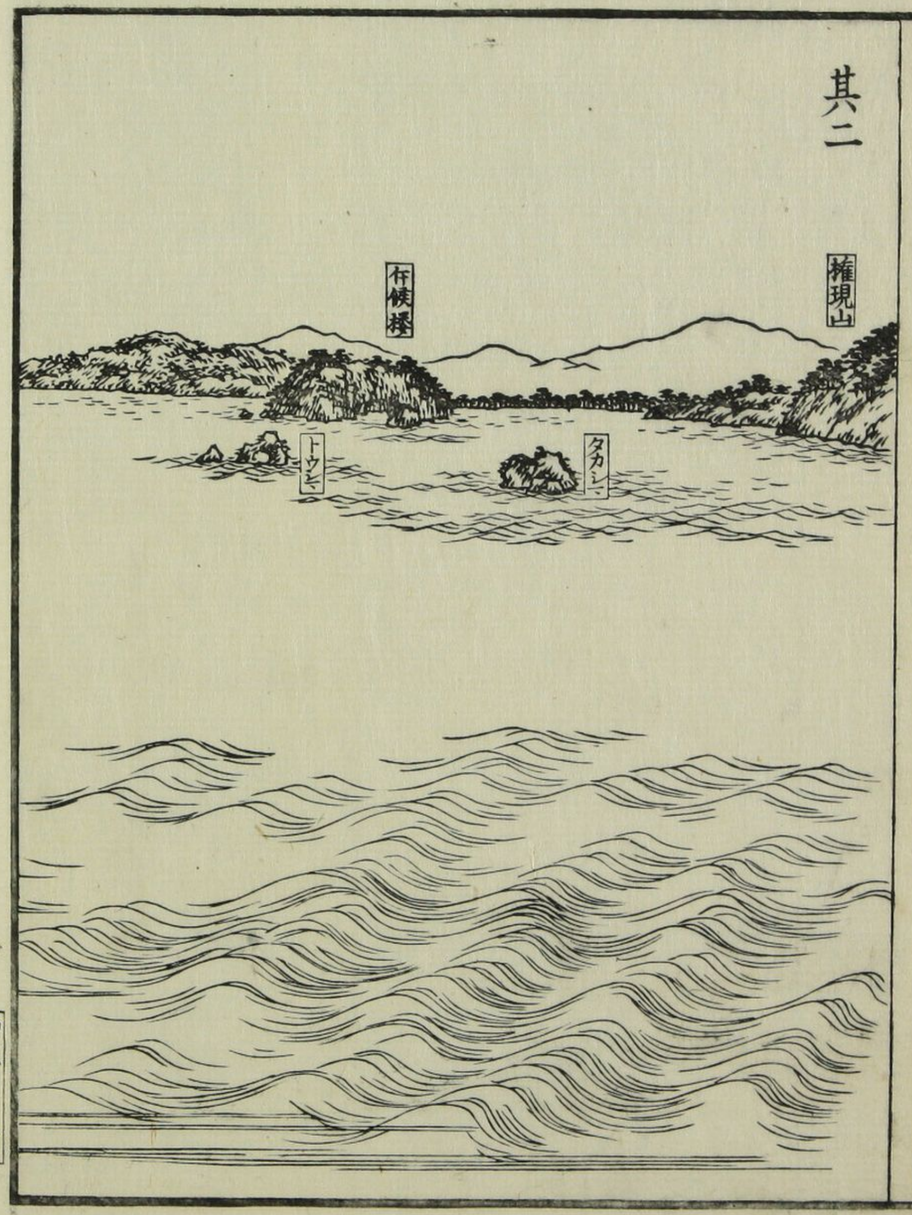
国々の内に温泉の数多くて惣て其名を挙ぐべからず
中にも伊豫の道後ほの国あるもいとけ年漏の温泉あり年漏の温泉も
又名数多中にも湯坪といい湯の某ゝらく二ツ乃温泉世に名高かりき

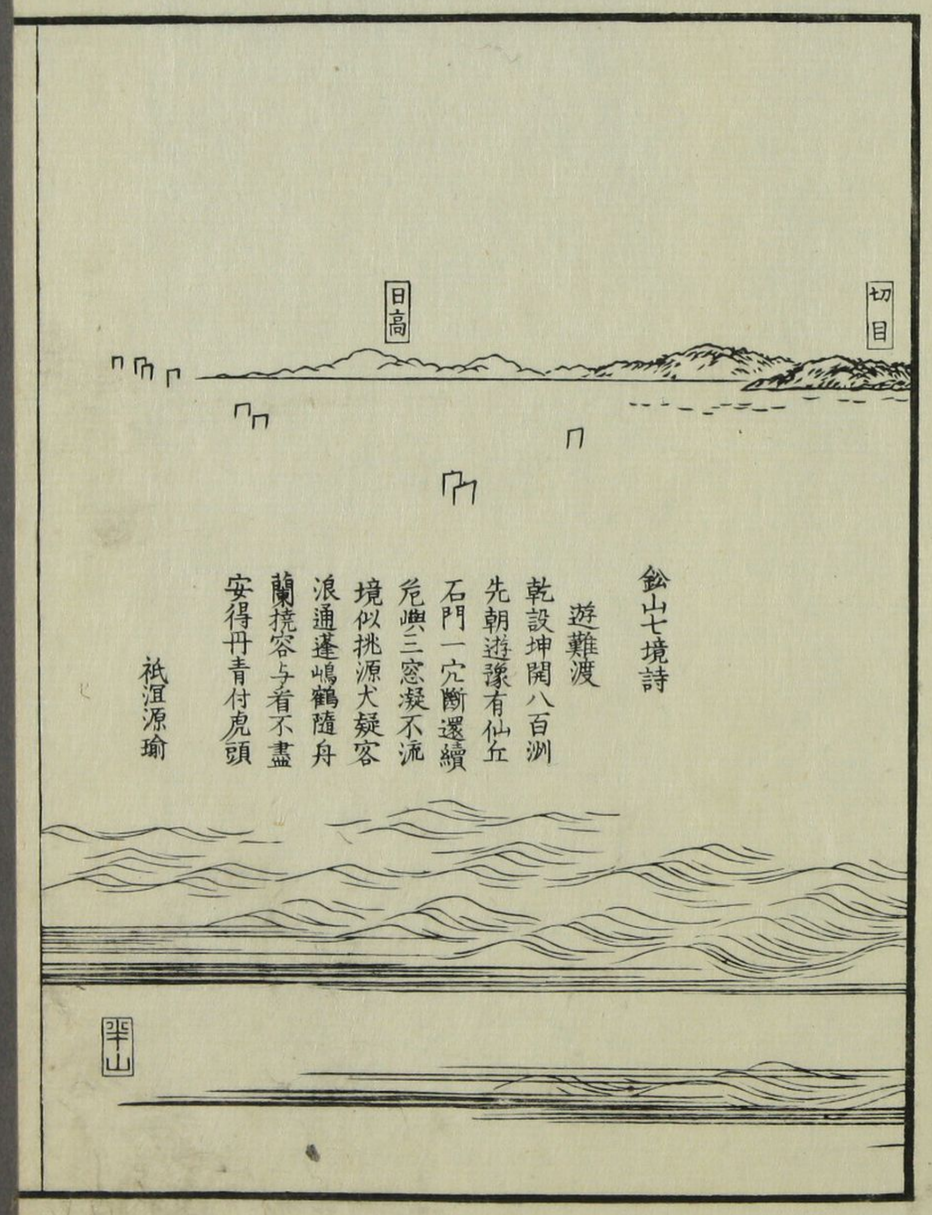
ちなみ書ふたぐ紀の温泉とぞうして其地の名をそれ姫ゝ人ゝる所をとるる
あゝんと物ゝ日本紀ふ　神明天皇二年十月　帝紀の温泉に幸ーのまとうるれ
ゝ先　有馬温泉年漏の温泉ゝ来ゝのひて新ゝ湯ゝて　天皇ゝ奏ゝて曰年漏の地
泉ゝてゝるゝ泉ゝ一日ゝ〻ゝ病ものゝ平癒せゝ老ゝゝて　帝幸れれ
泉ゝ　帝の御幸に　太子も又従ゝ　太子ゝ命天智天皇と称ーたまふ之
又日本紀ふ　持統天皇四年九月　天皇紀伊ゝ幸ーのまふ又摂紀ふ　文武天皇大宝
元年　太上天皇紀伊ゝ幸ーのまふ十月　御幸る武漏の温泉ゝ還ゝのまとうるれ
時　文武天皇　太上天皇御二方相ともに紀ゝ幸ーのまるるとゝれば　持統天皇ハ和
後ゝ度幸ーのまふ者ゝ絶ゝ　有るまゝ風ゝ伝ゝ
称ーのまふ年漏の温泉ゝ湯坪ゝ　紀中有馬温泉
ゝ伝ゝ　ゝ　紀中ゝ
御幸の道ゝ　ゝ　ゝ　

万葉
あしべゆく
白波の
たもとまを
いつ世まで
幸せつゝむ
川島皇子
平山
瀬戸


夜ごもり
ちゝ焼火の
あかれども
海松の上の
さもるごとき
顕仲
白良濱
湯崎
時雨松
崎湯

其二





鈴山七境詩

遊難渡

乾設坤開八百洲
先朝遊豫有仙丘
石門一穴斷還續
危嶼三窓凝不流
境似挑源犬疑客
浪通蓬嶋鶴隨舟
蘭撓容与看不盡
安得丹青付虎頭

祇洹源瑜

いつくしう廿人ばかりの磯山の翠波に映じ巖ハ碧苔でゝ立つ曲まる滝ひゝ長江漢をて
猟師ハ網をおゆ愛をおゆ愛の漁村、島嶼と云ふ彼方に絶ゆ〳〵ひるがわく傾く
そゝ〳〵ぐゝ浮ぶさゝ波ハ恰も碁石を打散せゝ〳〵ごとしこれも小高ひ所ゝ
この常の観ものゝ〳〵ぶ美ゝ仙境ゝ入ぶごとしとゝ所ゝ山峯かさなりゝ
を遶その形ることゝうち雲のいつゝ〳〵浮く或ハ消〳〵る海面ゝ多おれ常
帆波のゝるゝ〳〵人〳〵をそ行ゝ山ゝるさ西東海の彼方京ゝて　有るまゝ風
京と往来ハ多ひしも中ゝ云もゝ〳〵ゝ温泉又ゝいつゝ元湯屋形乃湯
浜の湯崎の湯摩接の湯ゝ所ゝ和泉師の曰温泉の説ゝ〳〵ゝ湯ちく
あれゝも赤ゝ廿里と云ゝ〳〵ゝ編笠ゝ水秀川ゝ仲ゝ倫ゝ所ゝ凡地中に
火の脈ゝ〳〵ゝ又ゝの孫ゝ相交ゝ流ゝて和泉温泉ゝもれをゝ廿地ゝ所ゝひい
紅山ゝもゝ〳〵地ゝと紅ゝと出せゝ故ゝ廿ゝ甘ゝ辛ゝ毒臭ゝ極熱乃温
泉ゝもゝ〳〵ゝ山ゝてゝ〳〵ゝ相ひゝ和ゝ〳〵ゝ浴ゝ所ゝ和ゝ〳〵ゝ中ゝ性の引ゝ所ゝものハ効験
いつゝ所ゝ速ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ中ゝ害も又多ゝ廿和ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵害ゝ所ゝ半ト

とする所ゝ〳〵ゝ著　天皇相陳ゝ幸ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

面白くして恍惚たる事紙墨に
海ゝ辺に出て行くこと
右指玄堂霊泉ゝ
博学にして和歌を嗜む文を善く

庚申山

金徳寺の傍ゝ上る事凡二丁余にして山上に庚申塚の石の祠あり此所ゝ
西北の眺望絶景なり石祠に青面金剛と祭るべし
浦の東南の山上にて絶頂一圓に平らにして廣く野原のごとく左一株も樹木なく
たゞ草のみ其表景なること言ひも尽しがたし

平草原

祇洹源瑜

鉛山七境詩　平草原

浦東南山口空曠如平野草茅連天
不料石崖上　復此得平原　春草不知名
閒花獨自繁　日暮牧牛子　一簑細雨昏

此平原ゝ向ふを望むに入江の滄海漫漫として熊野の連山峨々と聳へ田辺乃城下
神島神楽崎の嶋々直下に網を張り白良の浜備又田辺の浜辺にて手を續て
南部の浦岩代切目日高の端に元ゝ天晴る日に阿波の國なる島山までも見へ
渡り数多の小嶋此彼に有て石を撒き等しく其形各異にして絶景なる事彼松島の

光景に彷彿ゝと言ひつゝ

仆候楼　瀬戸の浦の海中に山上に高サ丈余の樓を築き樹木其周を圍ひ
四辺の藩士相交代にて鎮守異国の来船を守る

鉛山八勝詩　仆候楼

沙門躍龍

候楼密封俯前湾　曾鎮兆常備百蠻
明世今逢仁化遍　物情偏与白鷗閑

○以上江面浦ゝ見まで湯崎の温泉にて湯辺の街道と二番紀二井寺に
出る

出立王子社　四辺の城下西の口西谷村にあり往還の右一丁許にあり
古町に号ク

御所ノ谷　西谷村にあり今四圍にして地蔵寺後の辺
熊野御幸の時頓宮の跡なり

洲嵜礒則松　西谷村の通の左海辺にあり

阿古屋島　西谷村の中間往還の左
海辺にあり

御腰掛石　西谷村西の口の浜にあり傳云　崇神天皇熊野御幸の時御腰をかけ給へり

潮垢離ノ濱　同海辺にあり相傳往昔崇神天皇熊野御幸の時此海水に浴し給ひ故に後世
熊野系詣の貴賤ゝに至て此潮に浴し不浄を清むと例へ故に潮垢離の名あり

潮垢離橋　西の谷村の西の口にあり　**天神之鼻**　街道の左の海辺に突出さる岬にて天神の社
一丁ゝ先にあり

藤生山　潮ゝの橋ゝ二丁許先にあり　**舟田橋**　藤生山の先街道にあり
街道の坂道にあり

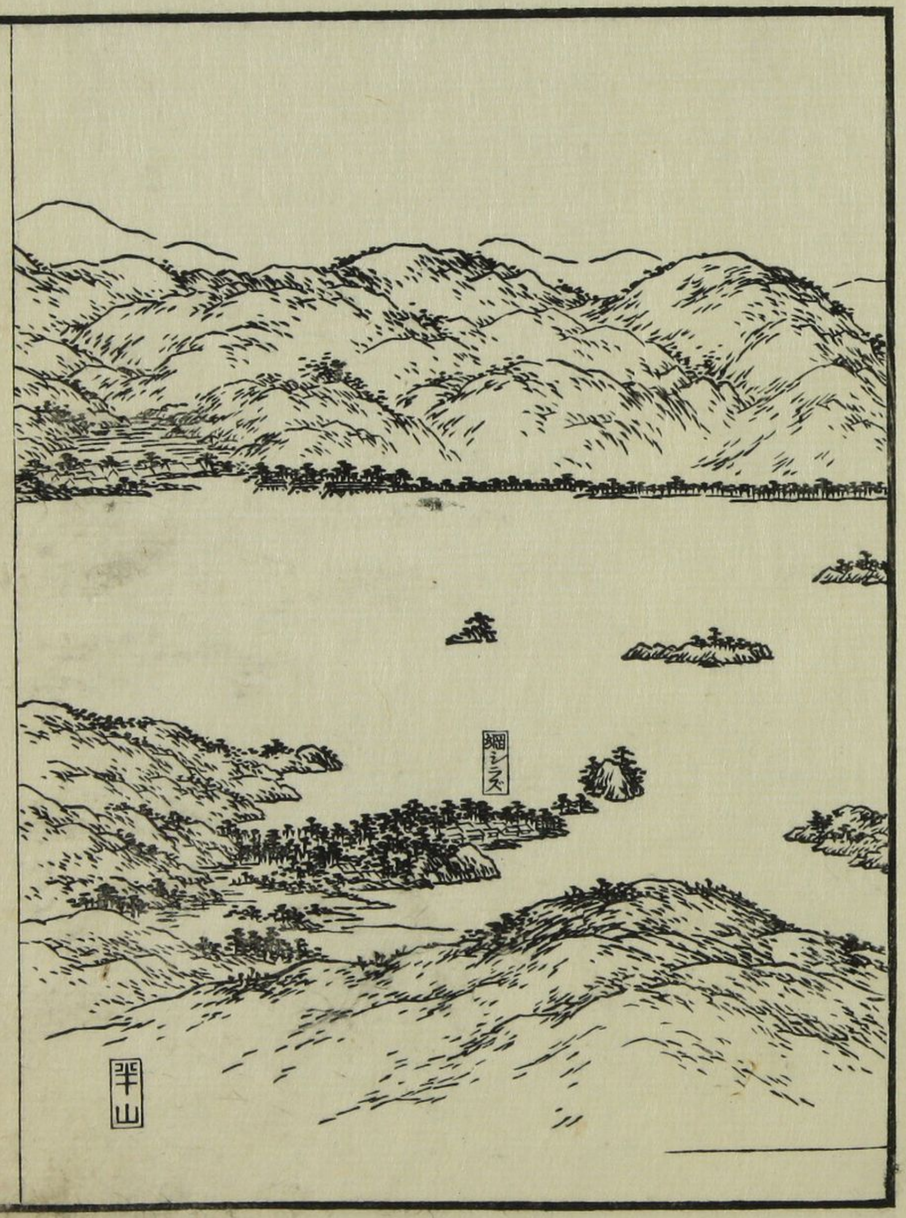
平草原より西北を眺望の図

鉛山八勝詩

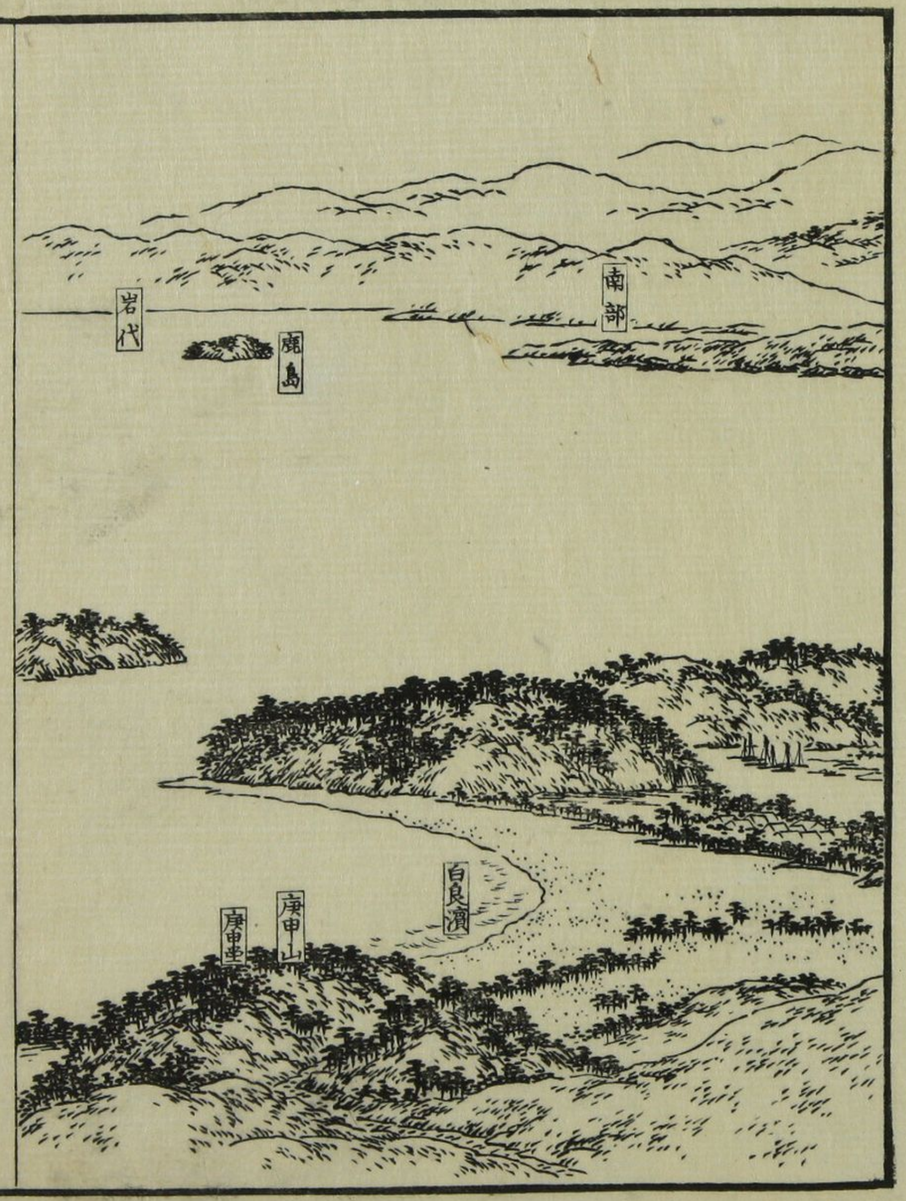
熊野峯

屹立三山入碧
空飄然吟瞩駕
長風醉餘試問
登僊路翼軫星
分杳靄中

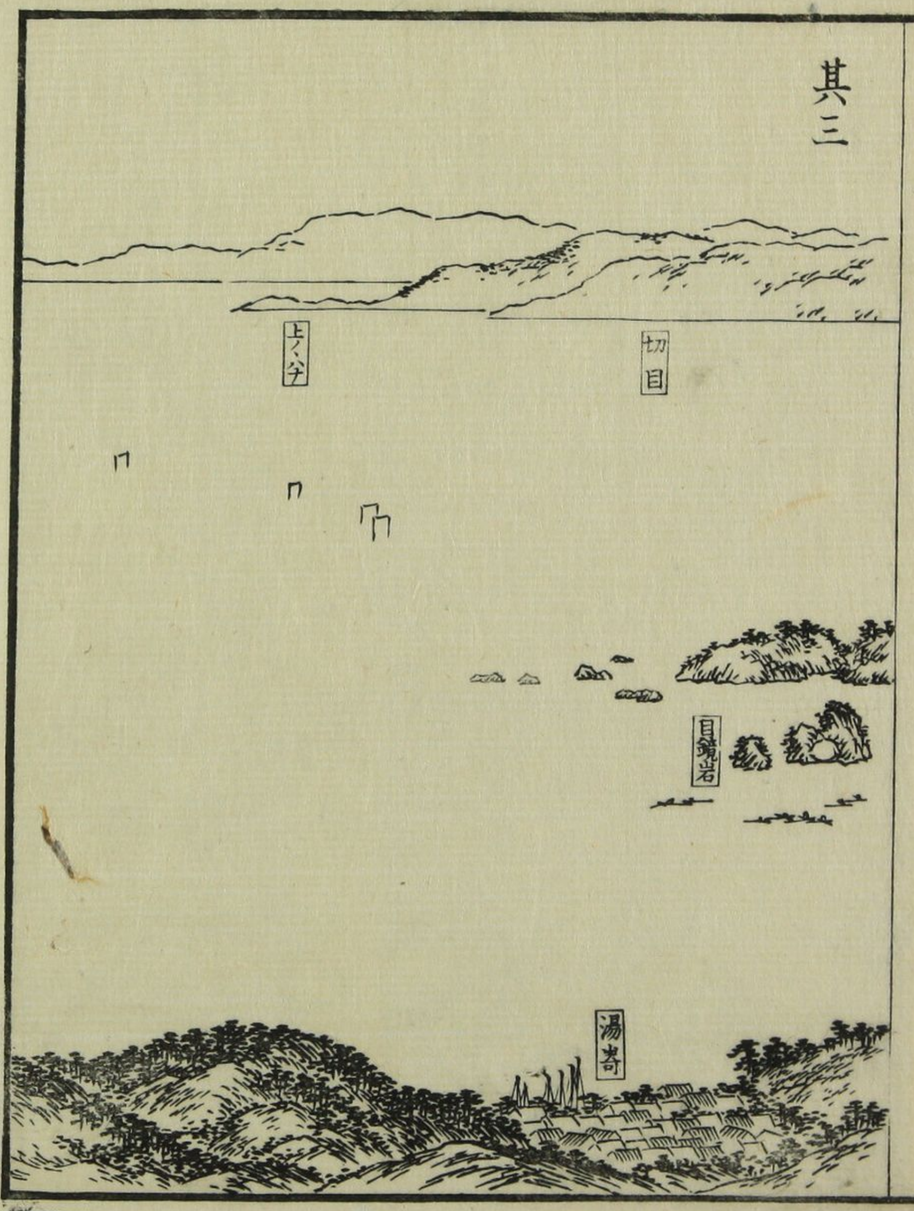
野田好古

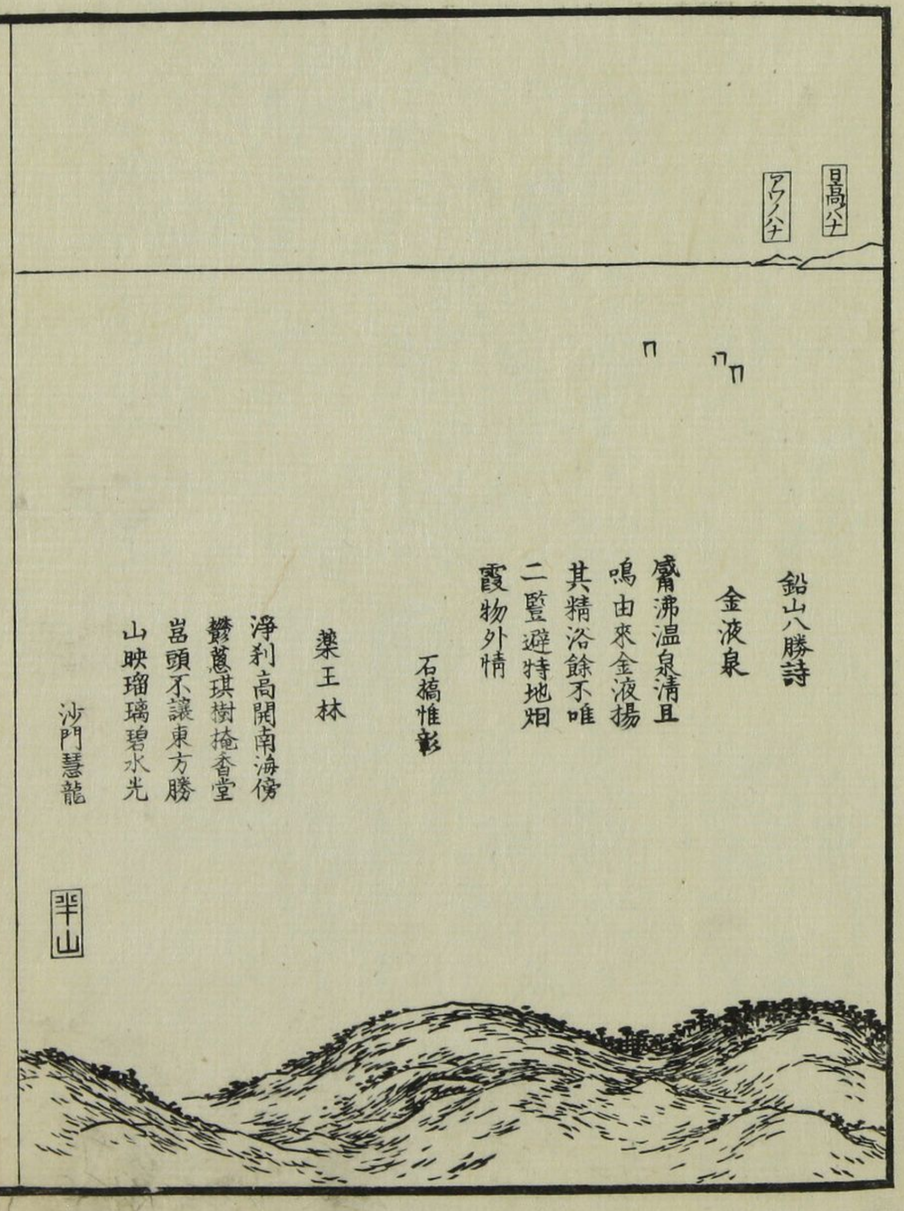


其二



其三





鉛山八勝詩

金液泉

鬲沸温泉清且
鳴由來金液揚
其精浴餘不唯
二豎避特地烟
霞物外情

石橋惟彰

藥王林

淨刹高開南海傍
鬱蔥琪樹掩香堂
嵓頭不讓東方勝
山映瑠璃碧水光

沙門慧龍

牛ケ鼻　芳養村の街道の左の濱に有る牛の鼻に似たる大岩有るを以て名く
此辺に鼠貝多く有て他に勝れて大きなり

芳養王子社　芳養村にあり街道右傍に
今若一王子と称す

袖摺石　堺村下の村の合街道の右に有り此所日高郡幸生郡西郡の界なり故に堺村の名も
あれども起るなるべし

高野坂　堺村より塡田村に入る間
凡十丁ばかり有り

鹿島　塡田村の出口街道の左十八丁許海中に有る無嶋明神の社なり道の左松林の内に拝殿
万葉
三名部乃浦　塩莫満鹿島在釣為海人乎見賞来六

南部浦　田辺より此地まで行程二里　松原と廢木公と云

漁人や浦のとまやに名部の方に袖乾すらん　大僧正玄信

御茶屋之趾　南部の道村にあり建仁元年後鳥羽院熊野御幸の時
御茶屋を建し古趾なり

南部川　道村より凡二十許に有　南部峠　南部の山の内村に有り地蔵堂有り此所に三石
あて左千里の濱観音八丁右紀二井寺と紀
南部峠の往還より十町許左の海辺十三丁の間なり

千里之濱　又千尋の濱とも云南部峠の往還

大鏡曰花山院御出家の本意有りつゝ行ひ給ひ修行せ給ひ
所々しらべ熊野の道に千里の濱に所を御心地そこなはせ給へ

濱つゝに石のいろを御枕にして大殿ごもりたるに甚近く海人の塩焼烟たち
のぼる心細さ実にいとあはれに思さるゝ

旅の空ぬれぬ袖にしのぶらむ海士の塩焼煙たち
夫木　来ぬと見る人の濱に月を待て秋風ぬる袖に思ふ

題林　雲さゆる千里の濱の月をみて袖ぬれぬ物思ふ　花山院

建仁元年御幸拾遺　ちぢの濱千里の濱に月うゝ　寂恵法師

後拾遺　岩代の濱に月うゝ　定家

続後撰　岩代の松に吹ける風の音に濱の月をみる　源通光

千里王子社　同所にあり千里の濱の王子とも云　清原元輔

観音堂　同所にあり千里の濱の観音と云　権大納言公実

片倉嶺　南部嶺につゞく坂と
下りて岩代村に入る

後拾遺　岩代の森に時雨ふるなり　東岩代街道右北間ばかり入所にあり

岩代王子社　西岩代の道の左二十許に有り濱の王子とも云　惠慶法師

新古今　岩代の神もあはれと思ふらん　ちぢの濱に祈む濱の千尋なる

元暦元年平維盛屋島を出て高野山にて出家し鮎野に系詣乃し紀
ゐくを過めひしぐぞ

源平盛衰記云 岩代王子と通の人其辺にて狩装束したる者七八騎ばかり會
うたて敵人来て搦捕んずるやと肝心を迷して各腰の刀に手をかけて自害せん
したる程に遠くに馬にうち乗て深く平にて通りたりし見知たる者にて誰ぞと
浅増くいぶせく思ひのひたいしく足をやとぞ指ゐ當國の住人に湯浅権頭入道宗重が
子息湯浅兵衛尉宗光といふ者あり良等ばかり奇げに思ひて此道者は誰人にて御
坐候ぞと問れば宗光あれこそ平家の故小松大臣の御子小権亮三位中将殿と一門
の人々に落連て西國にこそ聞奉りしに如何して屋島にうち是まで傳ひのひたるやん
小松殿の御時は常に奉公にうちし御恩をも蒙り此殿をも見馴奉りたれば近く
参りて見参にうちと思ひつれども道せばき御身にうちて憚て思ひ御気色
いかゝもうけたまわり扱過ぬあるる痛はの御有さまや碧の代の習ひと言ばかり心
憂うたる事にうたて馬を留めてしばし泣れば郎等共も皆袖をぞ絞たるらん

岩代清水

西岩代村街道の左北同許入所にあり

野中の清水とも云

家集 岩代の玉松が根はいかなる年にかはるとぞ思ふ　鴨長明

名寄 岩代は野中の清水あるとぞ多くとぶらふ人ぞ絶ぬる　経兼 祐正イ

岩代野

万葉集に出

鶏之薮 日村街道の左にあり事実詳らかにせず鶏は雀に似たる小鳥なり

夫木集に人問はぬ冬の山路のさびしさは拙はそぐ志ぬ　定家

岩代々濱

日村南の浜なり

鹿島手御會 岩代の浜路にもある風にしたがひて浪ゆたかにうちよせ　因幡守通方

岩代結松

日村道の左岸の上にあり古木は枯て後世まで一の松を植るよし云

斉明天皇四年十月天皇紀伊の牟婁の湯幸ひ時有間王子謀叛事ありしに
紀伊へ行幸に此岩代の浦にて御食ある時松枝を結びて為此ぶ幸ひあらば又かへりみん
ちぎりのひて御壽とゝもせの是にして岩代の結び松とゝぐ自王子其ありし日藤代をひて命
ゝもあれのひゝ

後崗本宮御宇天皇代有馬皇子自傷結松枝御歌二首

萬葉 磐白乃濱松ゝ枝手引結真幸有者亦還見武

中皇女命往于紀伊温泉之時御哥

全

君之旦毋吾代毛所知哉磐代乃岡之草根乎吉来結手名

尚長忌寸意吉麻呂山上臣懐良柿本人麻呂の哀咽哥ゝ等之

岩代之園 同村道より一町半許右ゝ

新古今

いにしへの岩代ゝ園の苔の花ゝ

後拾遺

岩ゝ代の尾上の風ゝ音ゝ

宝治二年百首

磐代乃岸ゝ松枝新幸ゝ

磐代之尾上 同園ゝ

式子内親王

岩代の岸 同道の左海辺ゝ

前大宰帥資仲

柳之水 同村道の右ゝ

後九条内大臣

榎峠 岩代のつゞれ島田村ゝ有

御手掛松 榎坂の内道の右傍ゝあり先君御手とりかけ給ふゝ

中山王子社 島田村坂坂の道の右ゝあり

切目川 切目本村の合ゝより南部より此所まで行程二里

御所之畑 本村の街道より半町許左ゝあり 後鳥羽院熊野御幸の時頓宮と建一跡ゝ

切目王子社 切目村ゝあり街道の右傍五所の王子の一ゝ云熊野中ゝ於て王子社ゝ有ゝ多就中此地大社ゝ 後鳥羽院熊野御幸の時當社ゝ於て和哥の御會ゝ

題 遠山紅葉切目山をの〻紅葉ゝ散ゝて〻ゝ初雪の〻ゝ降ゝ乃なかぬ涙 通親

御幸記曰参切目王子入宿所ゝ晩景又有題則書之持参戌時許留入續上了退去

平治元年冬平清盛嫡子重盛ゝ熊野山ゝ系詣ゝ時中納言信頼源義朝と

談ゝ謀反ゝ企て上皇ゝ囚ゝ奉ゝ納言信西を殺ゝ都ゝ乱妨ゝ清盛此地ゝ来るの

折〻〻都の乱と聞て大に駭に太〻當社小奉幣一品と卒て六波羅に引くされ〻と
物語又元弘年間大塔宮二品親王六笠置の城の安否と聞召まんが為に暫く南都の般
若寺に忍び御坐ひろ〻笠置の城すでに落て主上囚れさせ給ひぬと聞および〻
按察法眼好事五百余騎にて押寄せ終に此と道れて熊野の方へ落させ給ひ御供に衆に八
光林房玄尊赤松律師則祐木寺相模岡本二河房武蔵房村上彦四郎片岡八郎矢田彦七
平賀三郎彼此以上九人宮と始め奉て御供の者ども皆柿衣に笈と掛け頭巾眉半に責ら
其中小年長ると先達に作て豆田舎山伏の熊野系詣と體に見せ往く紀伊国智の
王子小着のひ其後義祠の露に御袖と片敷て通夜迷臣退治の祈念丹誠無二に御
勤あり程に暫く自睡させ給へ御夢に鬟結ける童子来つて熊野三山の間尚も人の心不和に
して大儀なりと是より十津河の方へ御渡ありて時の至らんと御待ちなるべ
西所権現に案内者に付まつらせて候べ御道まるべ仕るべく候て申と御覧ぜられ
御夢八覚にひ豆権現の御告あり思召れば未明に御悦乃
奉幣と捧げ頓て十津河と尋ひてぞ分入〻せ給ひける 太平記大意

切目山 切目の浦街道の右見る

萬葉 殺目山往反道々朝霞髣髴吾八妹爾不相年

夫木 見渡せば切目の山もあはれ社ほの黒ハ夫めくるもの也 續人不知

光川 切目より十丁許こなり 富王子社 光川往還の右にあり御幸紀に伊加留賀王子とあり復るに人と云

印南の浦の内

印南浦 光川より鍋坂と越て此地に至る

切目より行程一里に一村漁家多し

御所々平 印南村の中往還の右の山にあり 後鳥羽院建仁の頃熊野御幸の時の頓宮の址あるべし

叶王子社 印南村の出口の小し北 街道の右にあり御幸記に津井の王子とあるハ是歟

印南より八丁許に津井村より是に二十許行て猪鼻村夫より四十許行て上野

上野浦 村次に野島村右に村と凡そ上野と号し

熊野に詣で侍りる時上野に続くなり

續古今 芝見し跡の苔の下露ハ教へし民乃ほど八忘れぬ

夫木 数ならぬ此渡ひ北渡とも忘れぬ上野の原に多かりける

上野王子社 上野村の入口往来の右にあり 低語橋 野島村の街道に架る土橋と云 覚講法師

清姫草履墳 同街道の右にあり真砂庄司の娘清姫草履ひさ捨て所と云標石あり 袈裟掛松 草履塚の傍にあり

十二墳墓　同村街道の右にあり古塚十二ケ所甚間凡六七間許づゝ隔て列れり
土人傳て曰往昔天正年間和泉國淡輪村梶原一萬海賊と為て渡海の人々を
剽掠し舟人恐れて淡輪村に集り又此地に来て十二人の山伏となり又此地に来て十二人の山伏となりしと
則その山伏十二人の死骸とて葬ひしと云
観音堂　同村街道の右の傍にあり本尊観自在薩埵を安し西向寺と云
又撰待の茶所に孔法大師の像を安し
塩屋峠　野島にあり　王子川　南塩屋村の街道にあり
塩屋王子社　北塩屋村の往還の右にあり今義人の王子と云
御所之芝　王子の社にあり白河法皇御幸の時御旅館の跡なり
此地風景絶勝なり
白河法皇熊野に詣せらるる御供に塩屋王子の御前に
人々哥に侍りし侍りし
千載　なにはえの波くかなるる神あれば塔やの沼とたゝくらん　後三條内大臣
新哥　みのがる塩屋の浦に焼く藻に我神乃んもの邪　徳大寺左大臣
塩屋浦　塩屋里　塩屋峠と下りて南塩屋　北塩屋と云
千載番　足則えんやの浦里あり
名所　塩は風志ほやの浦と吹くるにのゝ夕埼なる　雅成親王
なにはとん塩屋の里小すむ海士も我人かこれ為やそと　中務親王
御幸記曰　十日雨降申後聊休入夜月朧に遅明出宿所参塩谷王子此辺又勝地有拔

鯉島　北塩屋村の左に遠く見る　比井水崎　同村の出口街道の
日高川　天田川とも云大和国十津川に分流して四十八里にて海に入頗る大河に船にて渡る
草根
さのがる日高の川も絶やらで沈ぐ紀流乃板人
丸山古城跡　日高川を渡りて向に見る山あり湯川氏の城跡なり
湯川民部少輔直光足利氏の末流なり甚先甲斐源氏武田悪三郎十二世の後に
して畠山高政の麾下に属し永禄二年八月河州留主にあり同二年守将高政三好
長慶の為に攻られ紀州に敗走して直光従ふ其後稍紀泉河三州の兵を募り
又根来寺の僧侶と結びて援に永禄四年遂に兵を起し泉州を攻め久米田に戦ひ
三好実休を撃ち而して是を殺し遂に進んで長慶の居飯盛城を攻む然るに勝利
なく大に敗して兵士殺す者千余人直光も又竟に戦死し一子兵部少輔直春継て
将となる丸山に居し時に天正十二年甲申二月秀吉紀州を攻んとする仙石権兵衛尉尾
藤九兵衛尉等を遣して海岸に沿て進んで是を攻る直春寄兵の至ると聞て族を聚め
謀て遂に自ら其城を焼き亡し熊野の山中に匿る明年赦されて和州郡山に到て居る

幾りどもあり秀吉密に謀つて人をして之を毒殺し是によつて湯川の氏族終に滅ぶと云

徳本上人剃髪之地 日高川より二十丁許先財部村街道の傍に標の石あり 街道の左一丁許にあり往生寺と云

財王子社 小松原村の合より一丁半許左の方にあり 小松原塩屋より一里半の立場

海士王子社 小松原村の出口往還の右へ入事 十丁許にあり御幸記に云愛徳王子是なり

八幡山 小松原村出口より右の山手に見ゆる森を八幡宮といふ 小松原の街道より右へ入事八丁許にあり九海士の里とのひ又鐘巻村ともいふ

天音山道成寺 天台宗にして千手院と号し八法相宗なり

本尊 千手観世音菩薩 漁夫の網にかゝりて海中より出現せしの尊像なりと云 今門前の在所を九海士の里といふ此尊像を引上し漁師九人の住せし遺名なり東西名勝畧誌に本尊十一面観世音是日光月光四天王の木像各聖徳太子此作の由也とあり尚紀州名所図会に詳なるべし

阿弥陀堂 本堂の右にあり

三重塔 本堂の前左傍にあり

鐘撞古跡 塔の傍樹木の中にあり

安珍墳 塔の傍にあり安珍の骸を埋む 標石に蛇塚と記す

當寺人皇四十二代文武天皇御宇慶雲年間紀大臣道成勅を奉て草創し所
あり安珍清姫の事人皇六十代醍醐天皇延長六年戊子八月あり本堂の
内に記せり又安珍清姫由来更来と蔵に望に任せて披見せしむ

右題柔八土佐氏祖宗の雷く所なり人其詞書則ち當時の縉紳家の手に成るのとぞすべて魔女僧と暴し終に毒蛇とあるに記せり又元亨釈書に載る所ハ村舎寡婦安珍の美なる姿を懸想し蛇身となりて之を著せりいづれも是なりやを八事実の明白なる事ハ紀州名所図会と見るべし尤境内堂塔の図も同書に詳なり畧

傳云當寺の鐘ハ其砌湯となり滅し今後新に鋳造し怪異のこと数しるして成就す故に今に至つて鐘撞再建なりと云然るに京師妙満寺に紀州道成寺の鐘とかるるものあり其故不審なり因て彼鐘銘を左に出す

紀州道成寺鐘銘 扶桑鐘銘集に出 此鐘今在妙満寺

聞鐘聲 智恵長 菩提生 煩悩軽 離地獄 出火坑
願成佛 度衆生 天長地久 御願満足 聖明齊日月
叡筆筆乾坤 八方歌有道之君 四海樂無為之化
紀州日高郡矢田庄
文武天皇勅願道成寺治鋳銘
勧進比丘瑞光 別當法眼定秀
檀那源萬壽丸 吉田源頼秀令力 諸檀男女
大工山田道願 小工大夫守長
正平十四年己亥三月十一日

道成寺

道成寺の能ハ猿楽中の
秘事にて容易ハ舞い得
ぐ〳〵京未諸流それ〳〵
大同小異にして黒頭或ハ
赤頭にして又鐘巻と号するも
にて所作に種〳〵差別にて
皆其家〳〵に伝る〳〵ぞ
此謡曲もて道成寺の
故事世に高く終に妄
説をも実のごとくに思い
誤ること少なからぬ

咲くらん
花の数うゝ
鬼貫

蛇塚　道成寺より一丁半此方田圃の中にあり
清姫の蛇身とろ〳〵埋むるなり

大山権現社　小松原のつゞき下富安村の出口街道より右二里余の山にあり

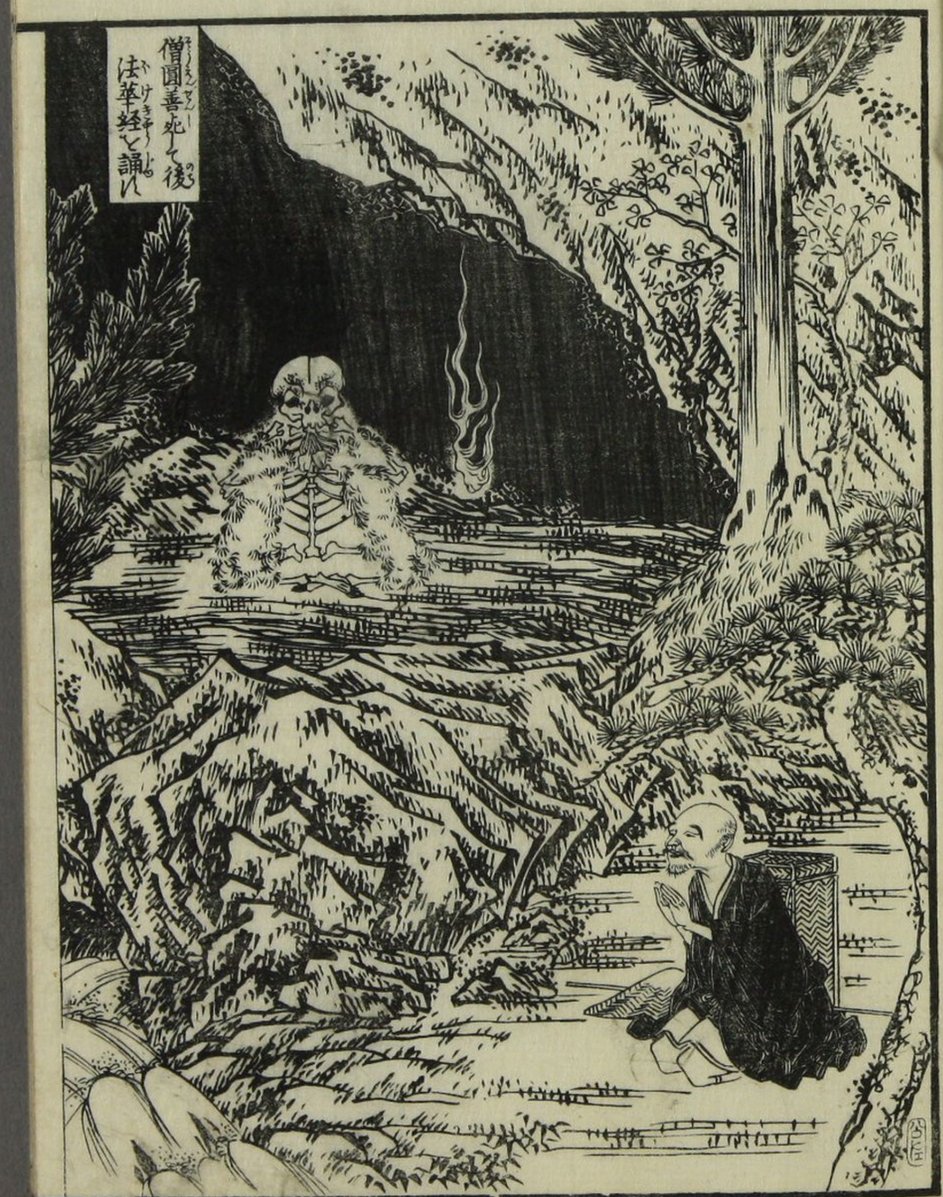
富安王子社　下富安村の出口往来の左にあり　同御旅所　王子社の並びなり
善道寺の王子とも云
富安つゞき荊木より萩原村の街道左の方二丁半許にあり高家村と云源平盛衰記
権亮惟盛無坂と打下り薄ぶの背山を越過て高家の王子を伏拝とあり

高家王子社　萩原村の出口往還より左二丁半許にあり　新熊野　槌の王子の森つゞき原谷村の
入口小松原より此所まで凡三里
内のくらの王子とも云

槌王子社　萩原のつゞき原谷村の中往来の　鍵掛王子社　原谷村往来の
右にあり　右にあり

馬留王子社　原谷と経て兼ぶ背峠より流手前二丁半許街道より右の方にあり
叡山の僧圓善此所に来りて死し其髑髏法華経を誦せし故名づくと云

法華ノ壇　元享釈書曰釈の圓善睿山の東塔院に居て法華経を誦む適熊野の肉背山
遊て卒に其後沙門壹睿なる者あり行〳〵山中に宿に夜も中半の頃法華経
誦するを聞く其聲微妙なり壹睿意に思へらく我より先に又人ありて此に宿せり
斯く一卷終りて礼拝懺悔し又一卷を讀む卷毎に此のごとく天明て人色傍か
骸骨にして支體全く連なり青苔遍く鎖て衣服に似たり想つに久しく歳月を
経わたる髑髏の口の中に舌あり紅蓮のごとく壹睿是を見て感じ怪しむその



由ところと見んと欲して次の日も去て夜入て経を誦する事昨日のごし暁に至つて
睿起て拝して曰く既に経を誦じ必ず疾心浩ひらん願くば本事を聴て以て亡の霊
感じ傳えんと骨人答へつゝく我は睿山東塔院の某なり此に至りて死して平生堅く
誓ひて法華六万部を誦せんと欲るに存へ日僅に半数にして夫せりされば其願力
授尽さんに此に住して尚経を誦するはゝ今既に数を終るに殆ど此に居ること久し
かゝど此を去ること幾ばくの内院に生じぐしと壹睿は聞もりて骨人を礼して去る
翌年睿に来るに骨も苔も見つゞられ

鹿背山 上下四十丁許原谷より登る此山の嶺日高郡有田郡両郡の界に峠茶屋あり
五丁ばかり下りて右の方に不動龍念佛堂への分れ道あり
盧主 浮きりん素のゆるふ脊れ山乃名を孩のそや麻も嗚ん 増基法師

沓掛王子社 無背と下りて河瀬村の合街道の右に あり
河の瀬村 河の瀬村の出口 稲荷社 河の瀬村の中街道 津之瀬王子社 河の瀬村の出口 半丁許左の方にあり
津兼王子社 井関村往還の右にあり 井関村の中街道 一丁半ばかり右の方にあり
久米崎王子社 宇田村の合街道 二丁許右の方の山にあり 廣川 廣村の出口に有橋
井関より此所まで凡十七八丁許 と架し尋共書て

廣八幡宮 廣川の橋より左の山手に見る 狭島 湯浅村の合口より左に見ゆる
湯浅川 湯浅村の入口に橋を架せり當湯浅八幡迴船の舟着にして人家建つゞけて賑
就中醤油を造る豪家多く諸国に積送る夥しく是を湯浅醤油と号し所謂名
産なり故に土地繁昌にして豊饒なり旅駕屋なり最
井関より當湊に行程凡一里余
苅磨島 湯浅川の橋より左の海中に見ゆる
鷹嶋 同左の海中にあり 明恵上人曰く此地に行く土砂加持を修せんにそ
玉葉 紀伊の國鷹嶋と申所の石とりて文机のうへに置く侍りりに書付侍
我さうく後に思ひ人もくばゝ花ゝ咲ね雪ゝ高乃いし 高弁上人
顕國社 湯浅村の道の右の方にあり 葉宇津峠 上下廿五丁湯浅より吉川に向る街道
逢川 水源湯浅の在堺尾より出て吉川湯浅を経て海へ
夫木 湯浅より凡十五丁先にして街道なり
花ちゝ咲ぬ夜ぬの雪ぬ光ゝ逢川乃淵ぬ志ゝ海 浮国
同 少浪る名ゝ ゝ ゝ 鮫師話や逢川の淵とゝ せん 為家
綾ノ井 吉川村の往還より半町ばかり左の山下にあり吉川村に逢川と越く向へ
傳云熊野御幸の時用ひし水なり
逢川王子社 吉川村の中にあり 逢川より一丁許く 御茶屋跡 吉川村の出口往還の左にあり王子の社の地なり
傳云熊野御幸の時頓宮ありし跡と云今田圃と
糸鹿嶺 糸麻山も上下三十丁許吉川にあり 古詠多一署ハ

万葉　足代過而糸鹿乃山之櫻花不散在南還来萬代

山家　糸麻山時雨に及とそもさせてかげ〳〵とする袖もかな　西行

糸鹿里

峠と下りて中の番村より是とす

良玉　あるあるいるみ里乃ひとまもたんとするやちくさ日もかな　源仲正

雲雀山

糸麻峠より二丁余東にいる〳〵傳云中将姫の古跡もかと得生寺より八寺わく本尊阿弥陀佛中将姫十三歳の御影を安置又西行上人文覚上人ゆかりの跡とのこれりとも云姫捨杉経塚宮屋侍臣春時夫婦の墓石のれ菩提の塔もどり〳〵按大和国宇陀郡もひぐり山らつる有てもすじく中将姫の古跡〳〵青蓮尼寺と号せ一寺院りり是も継母の憎〳〵捨ら〳〵と傳へもるれじ一説に中将姫横佩右大臣豊成郷の女にて恵美押勝八豊成の弟なり初め押勝ハ橘の奈良麻呂と謀せ時に兄の豊成も縁ありて流罪ありしに豊成郷の息女ひ継母の讒言に〳〵まりまび和州のひぐり山も當国のひぐり山も不審〳〵多し尚考へべ

上王子社

糸鹿峠と下りて中番村の水王子社中番村の中

稲荷神社

入口往還の右にいる　中番村の中往還の左にいる此地ハ白河院熊野御幸の時御車とゝまりたる古跡ゝ云

得生寺

中番村の中往還の左にあり雲雀山得生寺の里坊もあるゝ

有田川

中番村につゞく水源高野山より出て凡十九里の間を流れて海に入湯浅より此地まで凡一里半宮原川とも云

世をつゝむぐろうのゐ田川　岩くぐけて往ぞうづゝ　慈鎮和尚

御茶屋芝

在田川の向ふ岸往還の左にいる東西百間南北二十間許

宮原八幡宮

後島羽院熊野御幸の時の頓宮の跡あるゝ宮原の道村往還より二丁許右へ宮原ハ在田川の向ふ岸へ

蕪坂

上下五十丁の峠へ

山口王子社

蕪坂の登り口往来の左に有

凡書之阿弥陀地蔵

蕪坂ゆ〳〵登りく左の傍にいる磐石に阿弥陀地蔵の両像いるを傳云弘法大師凡て書のふゝぐ右の方に休所にいる

蕪坂嶺王子社

同坂の間往還の右にあり若一王子と云○此嶺ハ在田郡海士郡両郡の界ゝ峠ゝ畑村と〻有是まで在田郡是より向ふを沓掛村上云此地海士郡へ宮原より加茂谷迄凡一里半

市坪王子社

加茂谷市ノ坪村にいる往来の左へ

橘本王子社

橘本村の出口街道より二丁許左

入佐山

橘本村の西南五丁許にいる土人傳云花山法皇熊野御幸の時の御製の〻〻て哥にいる

橘本村の登り口

藤白山

橘本村より登る上り十二丁ほど十八丁ほどゝ

藤白の御坂又藤白峠とも云或藤代とも書て古詠多〻畧之

万葉　藤白の三坂平越跡白拷々我衣手者所沾香裳

藤白山地蔵峯寺

藤白峠にいる道の左傍へ本尊石の地蔵尊と安ハ石像の背に彫〻〻曰勧進聖揚柳山沙門心静　大工薩摩権守行経　元享二年十月廿日と有

獄山

市ノ坪の往来の右の方へ

所坂王子社

橘本村の中街道の左にいる

岩屋山福勝寺

王子社より二丁許奥山手に有本尊十一面観世音又寺の西北滝にいる

御所之芝　峠の道より一町許右へ入　御幸の時の御休所云

嶺王子社　坂の内往還の左あり　御幸の記ハ塔下の王子とあり

金園筆捨松。硯石。藤代松　藤白坂往還の左右あり　風景の細見名所図會に見へたり

藤白王子社　藤白山の麓往来の右あり　廿ヶ村の生土神にて例祭二月二日六月十五日九月九日　十月十日　白雉子の馬鳥居の銘ホの事　委名所図會に出

捕神社　境内あり　相生松　社前あり　名木　寶塔の基　重石　宇多法皇　花山法皇　白河法皇　熊野御幸の時建させたまふ或御哥塔云

建仁元年十月　後鳥羽院御幸の時當社に於て和歌の御會あり

松雲山中道寺　王子権現の別當にて天台宗本尊十一面観世音　聖徳太子の作と云　名所図會に見へたり略ス

鈴木三郎重家宅　義経弓掛松　亀井六郎旧宅趾　字亀井やしきと云ひ街道の右の方あり

一之鳥居旧趾　鳥居村の東にあり　一の鳥居あり　熊野権現の　抜戸王子社　王子に同所にあり鳥居の

仙臺山浄土寺　同村にあり本尊阿弥陀佛　鈴木亀井兄弟の碑石山名義理の碑石ホ境内にあり

亀井の泉　浄土寺の山の麓にあり　押之井　鳥居村と藤白との　岐ノ神社　藤白より名高への街道鳥居浦の道の右にあり

藤白浦　藤代村にあり加茂谷より此所まで一里半繁昌の地　名高村にあり街道の左の渓にあり　古詠多し井松原の古戦場あり　万葉

木海之名高浦　雨依浪音高鳥不相子故雨　人麻呂

紀神社　名高村の入口往還の右にあり　名高の入口街道より右の方に見る春日山云　春日明神の社あり　盛衰記に出

当地の生土神にて例祭九月十日

三上山

日方川　日方村の入口にあり名高へつづく　干潟浦　日方村にあり　古詠多し

玉葉　夢ぬまに絶つるとゆめ夕汐みち干潟の濱に沈む月かな　為家

黒江坂　日方へつづく街道　黒江椀　黒江村の名産と村中塗物の工家商家多し

黒江村の入口　黒江村の西辺にて大きく色ろ〳〵の石にて形牛のごとくあり〔ゆゑ〕ゆゑ満潮ばかりまた干ぬれば出る然るに此の頃一ヶ所砂に埋もれ出て終に堀出せしに大きなる牛の骨出て今八幡の社にて家居建つきて

黒牛潟

四辻より一所の石垣の下にあり　黒牛の海　古詠多し

万葉　黒牛乃海紅丹穂経百磯城乃大宮人四朝入為良霜　藤原卿

同　古家丹妹等吾見黒玉之久漏牛方手見佐府下　人麻呂

古城跡　同村南の山手にあり　明應年中山名修理太夫義理の

舘池　同村北の出口にあり　服部川　黒江と紀ノ川の間にあり

琴ノ浦　毛見の崎　舟尾の境にて紫色にて他の色と異なり　鎮座石　毛見の浦の海中にあり　御鎮坐島と云昔巌の

夫木　玄風ノ治の志ノ舟の琴ノ浦かのあたれば　仲正　時は自然と音の故に名づくと　此地の沙石残れり

濱宮　街道の左海辺にあり毛見村にあり名草の渓にあり　以て名草の渓の宮と云

本宮殿　天照大神殿　日前國懸宮　摂社中言神　末社　天満天神　蛭子神

神樂舍 本社の傍に御腰懸石 本社の傍に祠とりて祭まつり天照大神此所に假殿ありゆゑ下に石ありと云てかくハ傳へしぞ

御供所 境内堀際に御馬屋 鳥居の傍にあり

當社ハ上古崇神天皇の御世に天照太神の御霊と大和國笠縫邑に斉祭りあひしに尚も其宮のふさはしき地を求めんとて豊鍬入姫命に命じて國々を見めぐらし先給ひる程に豊鍬入姫命ハ彼御霊を奉して行めぐり遂に同御世なる五十年四月此淀宮に遷り座しこの年ゆ程ハ鎮座ありそ 委しくハ名所図會見へし

名草の濱 布引村より毛見の浦 同所の浦とも 名草の浦 布引の松 布引村あり 街道の左の渓 古寺跡 名草郡名草山の半腹にあり補陀洛山紀三井寺ともいふ 古義真言宗 本坊の余塔頭九院あり

第二番 紀三井山護國院金剛寶寺

本尊 十一面觀世音菩薩 長等身 為光上人一刀三禮作 或威光上人書

秘龕 千手觀世音菩薩

開山堂 本堂の上にあり開山為光大自作の木像を安ず

二重堂 開山堂の南にあり本尊五智如来 長一尺五寸

如意輪堂 本堂の左傍にあり 如意輪觀世音を安ず

札納堂 如意輪堂の左にあり二十三所の觀世音を安ず

経塚 開山堂の左の方にあり為光上人大般若六百巻と書写し納めし所あり

鎮守祠 白山妙理權現 熊野三所權現 金剛蔵王權現を祭る三重堂の左に隣る

大師堂 弘法大師を安ず僧正真然作 當国十八所の一なり鎮守社の下有

三瀑泉 揚柳水とハ本堂より北二丁ばかり是にて紀三井寺なりそ 吉祥水とハ本堂の北二丁ばかり

常行念佛堂 石階の登り 二王門 金剛神の両像を安ず 運慶の作 右にあり

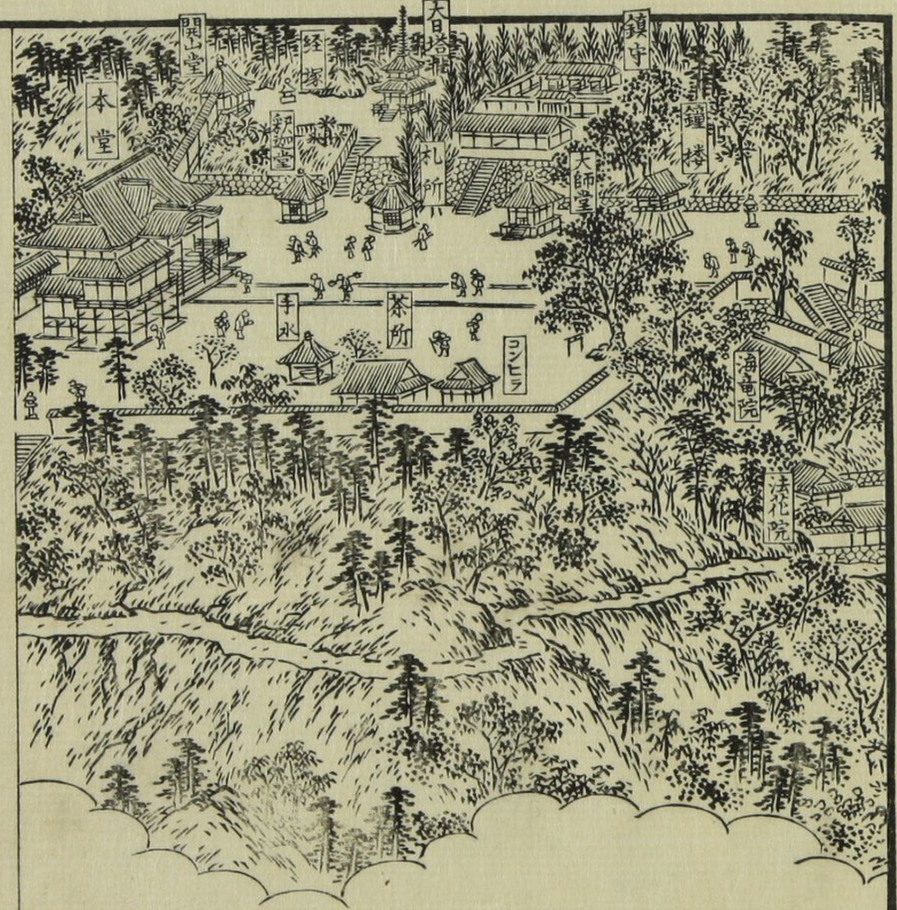
禁殺生碑石 二王門の下にあり 地蔵堂 二王門階下にあり 應同樹 本坊の裏手にあり 奇特の樹 本字梅溪の書 石の地蔵を安ず

御參詣時 應同の木ぞ〻ろ〻ぐさもくてあるひとハ過すざりけり 御室御所

千手谷 本堂より艮の方五丁許 龍燈の松 千手谷の中にあり

夫當山ハ唐土の沙門為光上人の開基にして其ゝ〻の彼土に有て常に観世音と信じ道德世に高く聞へしが尚も済度と廣くしめんと遂に光仁天皇の御宇宝亀元年五月日域に渡り普く霊地と求めて一大巨刹を営んと諸國を巡回し始めて此名草山に登りて最勝の妙區なると知り此地に錫杖留むべきと思ひ夜に至りて数道の異光山上に立のぐる程に上人いやゝ思ひ定めて其光に随ひて尋ゝ伺ひ見るに最幽なる谷陰のさゝも年経る松が枝に千手観音現れ給ひて御身より金光を放ちめぐりて有り則千手谷燈明松と上人余りの有ざるさに

鐘樓 大師堂の左に有往古の鐘ハ今ハ亡び 金毘羅堂 大師堂の對 金毘羅權現を安ず


大日塔
鎮守
興山堂
本堂
経塚
釈迦堂
大師堂
鐘楼
手水
茶所
コンヒラ
海竜院
法花院

第二番
紀ノ井寺
常念仏
宝性院
清浄水
松樹院
勾欄
三王門
瀧ノ坊
普門院
低園
玉泉院

其二

頭に頂禮合掌し大悲の誓ひ空しからずんば我を助けて弘法の功を遂させたまへと深く祈誓をなして此霊像を龕中に収め草堂を結んで安置するのひるがへる奇特の尊像と末世の薄俗に法をもて容易開龕を許さんは却て威徳を汚すの恐を有して則ち十二面の尊像に一刀三禮に彫刻し以て本尊とし彼霊像は固く秘めて開かず梵字のみ是をもて本尊の霊験日に新に上人の弘法月に盛んにして四方の緇素蟻のごとく集て麝臍ごとく渇仰のいろかぬるに嬰児の慈母を慕ふごとくなれば漸に伽藍成就し堂宇の荘厳いろいろも一山をあまねく浄土の相を変ぜむるに於て上人向来佛法興隆のため且は天下泰平萬民快楽のため手自ら大般若経六百軸を書寫山中に納めらる今の経塚此時南海の龍女忽然として現ぜん曰上人此土に来せのひて後佛法世に盛ならん海底の魚鼈も常小正身の観世音に拜する事を得て將来すべて上天の果と結ぶこと何の功徳か是に如くんさんば是報恩乃ち例歳七月九日夜毎に此海上に浄燈を献じ永く上人の高徳を世に耀らし

奉るべく約束つゝ尚七種の寶を捧げて上人に奉る所謂香炉。寶螺。鈴。錫杖梵鐘應同樹海樹おゝ寺說曰此海樹とハ則ち桜樹にして當山に七本桜の名ありハたれば故なりとぞ又此七種の内にて梵鐘のみとゝ[illegible]ふ後に雑賀の浦の海中より捧げ上人没後小其行ゝを志ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

い意とも言つゝ又法然上人の御哥〻〻

慈氏八日ゆ〻〻近〻もりいでゝ月を眺し老ぬ哉う那

宗祇坂 當山の裏坂にいう 芭蕉翁行脚の〻記此坂の茶屋本太〻らるにやすゝひて宗祇法師の古事をなゞらられ〻本太祇もごろにかゝり申〻〻ぞ

宗祇もめぐり逢ぬる

名草山 紀ニ井山の惣名なり

萬葉 名草山事西在来吾意千重一重名草目名國

當紀ニ井寺より二番粉川寺へ直道行程六里

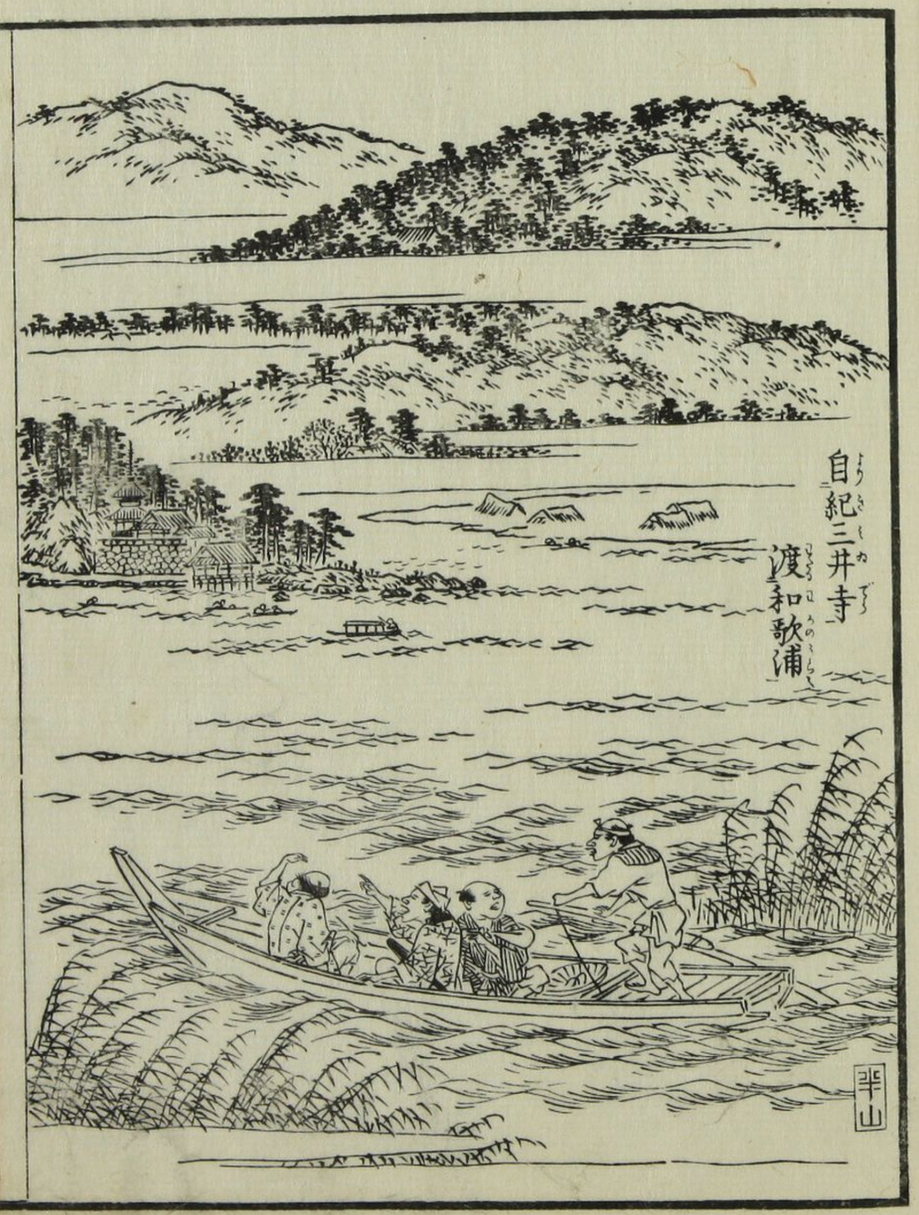
右紀ニ井寺門前を右へ若山街道ニ曷村より少し行て又右の方網道と行事一里許りて日前宮〻〻大社にいう境内を行抜又一里ばかりゆき八軒屋の東由里村へ出る是より本街道岩手に至る 又和哥山へ出るハニ葛村を少し行

又紀ニ井寺門前より和哥浦へ十八町船渡へ有陸路を迴るバ凡一里許〻

明見社 東北の山有 裝束松 坐いにし時里人ホ〻〻を持来りて御裝束とゝのへ〻〻ゐ也へ村と〻〻〻村の中にいう此松ハ〻〻〻渡の宮〻〻日前宮の神鏡秋月村へ迂村へ云ハと將裝束の松と号〻〻〻で蓮如上人紀行〻〻

あ〻〻ゑれバ裝束ま〻〻ゝ此事おうも

蓮如上人



塩竈　三首村にあり此余紀ニ井寺和哥ホ[illegible]ウ当国の名産と其味やゝ〳〵うゝて味噌醤油と造る事可もりトス

日前宮　秋月村の西にあり　延喜式　神名帳に出

正殿　日前大神　相殿　左　石凝姥命　右　思兼命

末社　三十社　瑞籬の外四面に羅列す

國懸宮　國懸大神　相殿　左　鈿女　命　右　玉屋命

末社　三十社　瑞籬の外四面に羅列す

○

摂社　二十社　宮中の所〻にあり

殿舎。神庫。寶蔵。神樂殿。御炊屋。太々神樂殿。惣門。中門。裏門

廳屋。三井垣。社役所。大鳥居。反橋　いづれも境内にあり

飛山　社頭の南田圃の中にあり　神畔　太田村にあり因宮にも造酒の森もあり　神酒殘つゝ一所トス

日前大御神と称し奉る御霊　代八御鏡國懸大御神と称し奉る御霊

代八日永にまゝく共に天照大御神の前霊にて座すもの

例祭　正月元日小朝拜　七日白馬神事　十曽都鎮部祭御戸開　胃碧祇鏑馬　六月朔日夏神事

九月廿六日神事　十一月十日日前宮相嘗　十二月十九日国懸宮相嘗　岩手堰祭三月三日不定

七瀬禊拔　千手川原にて行ふ　国造家一代に一度の大神事にて此余年中行事国造家の日記ホ[illegible]紀州名所図會巻之巻下に出尚社頭の全図詳く畧之

且此辺にその名所四所甚と多く残らず名所図會に出さんがために畧す

尚此余もなれし潮代

妹背山　和哥の浦にあり郭公山ともいふ紀三井寺にあり渡り

観海楼の辺に舟と着る此傍に亀石といふる名石あり

夛寶塔　もせ山にあり本尊釈迦佛阿難迦葉の三尊と安し慶安二年中正院日護僧都の開基にして神君三十三回忌の御追福にて建立の一所なり

唐門　瑞門　自然石階檀　拝殿　観海楼　海岸の掛造り　塔頭　海禪院

経王堂　宝塔の裏の方三断橋の東詰に有　梵語の碑石あり　三断橋　経王堂より西へ三橋と称す　芦辺茶屋　芦辺屋朝日屋二亭あり

嵐の祠　三断橋の西詰芦辺茶屋より九〻廻り所にあり　土人呉の嵐ともいふ牛の嵐ともいふ石屋の内に祠あり　奥洗石　奥の岩屋の前にあり口中にあり

玉津嶋神社　同所の北にあり祭神明光佛の霊に衣通姫と配し祀る　拝殿神樂舎寶庫

岩根ノ薄　本社の前にあり　御供所　御供井　内にあり　鳥居の　玉津島の古跡萬葉集に多く出る此畧す

家集　玉津島岩根ノ薄　代の撰集　数多出る此畧す

玉出島　同所にあり　朧山　社頭の後の山にあり一山の岩石奇巧の女理のごとし故に

望海山大相院　律屋村にあり天台宗　本尊釈迦佛　脇士阿弥陀佛　千畳敷　同寺の後に有　望海楼の跡云

和歌松原　玉津島の辺より天満宮の辺まで〻〻松林もしし〻ぞ　一條内府公

御宮の鳥居のまへに古松ありて土人さゝ杢とゝて是松原の遺木なるべし

和歌御宮 同所西の山上にあり御別當和哥山天曜寺雲蓋院天台宗にして本尊藥師如来と奉安し御祭礼四月十日世に和哥祭と高く聞ゆ

本宮 三坐 東照大權現 日吉山王權現 摩陀羅神

拜殿 鰐口三口 唐門 本宮の前に有 神樂所 唐門の傍に有 樓門 護摩堂 もと石階の上に有 五大明王十二天尊を安し

三重浮圖塔 本宮の東にあり 藥師堂 本宮の西にあり本尊藥師如来 開山堂 慈眼大師を安し

辨財天祠 御橋の東に有 御橋 擬宝珠 下馬榜 日光月光十二神を安し 下馬橋 石橋にして此傍に松屋竹屋の茶店あり

石鳥居 銘曰 東照揭曰 華表劉石 維明維堅 万世無跡 那波道田の撰する所にして 書は御再建の時に紙園南海の筆なりと云

天滿宮 御宮の西の山にあり菅神を祭る拜殿樓門末社小社頭に列し 観音堂は後山にあり 十一面の尊像を安し樓門の左の廳の西側の折れ牛の車にあり車の下に負享五年四月九日一記す

和哥浦 西南出島浦に有 古哥多く畧之 御旅所 同所の洲崎に有四月十七日 神輿をかゝ渡御ありて芦生げりて有り 大岩 同所の磯辺にあり 天神磯 此辺尾石 同所の海中に有

芦辺浦 和哥村の北の入口にあり鶴の入江の干潟にて芦生げりて有り

鶴立島 玉津嶋のあなたにあり

片葉ノ芦 同所にあり是又芦辺の遺跡なり 望海樓遺跡 妙見堂の山の西に平畳にして高く聞ゆ此遺跡一名妙見堂と称す

妹背山養珠寺 同村にあり法華宗本尊三宝尊像高組大士 一切経蔵 持佛堂 共に境内に有

妙見堂 右同寺の後の山 養珠院殿尊牌を安し 雑賀城趾 養珠寺山の尾にあり鈴木氏代々居住す

五百羅漢禪寺 和哥津屋村の北一町余にあり 禪宗曹洞派 本尊釈迦佛 周囲に五百羅漢の像を安置し往還の右の傍に

秋葉權現社 五百羅漢寺の後の山にあり 観音堂 繪馬堂 山上にあり 亀遊巌 秋葉山の鳥居の傍にあり亀の遊ぶに似る故号く往還の右の傍にあり

鶴立島 五百羅漢寺の前にあり玉津島の辺まで芦辺より此

愛宕山圓珠院瑞雲寺 街道松原の右にあり山上に愛宕權現の社あり 天台宗にして子院二ケ寺あり

吹上の濱 街道の左の方の海辺にあり往来に吹上の小野 吹上の峯 古哥多く畧之

根上り松 紀之井寺にあり陸路と来れば此所に出る凡和哥山の御城下へ七八丁にあり此間を吹上と称す此地の松すべて其根高くあらはれて鶴松亀松相模松の名ありて奇異なる事言ふべからず

和哥山御城下の盤花 もろこし言も更なり旦名所旧跡多くして容易に記しがたし是は紀伊國名所図會第一巻に詳なるべきを閲して其勝地を尋ぬべし故に畧す

御城下市街大橋より左へ行バ加太粟島神社への街道なり 行程凡二里 北島の日比より渡て行

又橋をもどりて本町通筋を行バ二番粉川道なり町の出端に惣門の外に拵造りて

旅駕屋町なり 和哥の浦より此所まで行程凡二里なり 是より八軒屋 和哥山より一里 宿休所あり

八軒屋より粉川へ直道八由里村より岩手の渡を越へ長田観音寺の境内を多

抜け粉川へ出る 行程凡六里 ○又根来寺へ廻る八軒屋より並木の松を過て直に

行バ岩手の道へ十二町ばかりて左の方川負へ下り田井の瀬の渡を越て川ぶち村に

至る此所大坂くの川ぐり高中野黒木ホの村を経て西坂本に至る　此所根来寺の門前へ

紀州街道なり

田井瀬渡　紀の川なり船渡し　水源ハ大和国吉野郡大峯が原より出吉野川を経て

ちくに至り末終ハ海へ入凡上下の流き四里に及ぶ川ぐたもひ

川辺王子社　川ぐ村へ行御幸記出　御船神社　西坂本村へ行例祭六月廿日

八軒屋より此所すぐ凡一里半　此所ハ根来山の門前へ川ぐり行程一里半に有

一乗山根来寺大傳法院　根来山へあり新義真言宗　女人禁制へ

本尊　大日如来　大傳法院堂ト云　長一丈八尺鳥瑟ヶ　一山の中央へ有

脇士左　金剛薩埵　長一丈六尺待賢門院の御髪ヶ坐下へあり　右　尊勝佛頂　長一丈六尺花咲ヶ　美福門院の御髪ヶ

大塔　二層へ　同所の右有　光明會通塔　大塔の西南有　本尊　虚空蔵菩薩　讃摩堂　同所の右へ並

御影堂　大塔の西南へ有　興教大師御廟ト云　二部権現社　御影堂の下方へ有

開山覚鍐上人の像ヶ安ハ

錐鑽不動堂　大塔の東南有　八角作の堂へ　本尊不動明王　長四尺寸　求聞持堂　不動堂の左の上へ有

本尊虚空蔵菩薩

大門　西坂本へ上る谷川の向へ有此所より下来へ　天真橋　大門の外の谷川へ架ル石橋ヶ

門前の傍へ金銅の不動尊へ　高欄擬宝珠造へ

此余一山小諸堂多ク且坊中許多へ又境内に桜樹多ヶ

尚什物霊寶数品将縁起由来ホ未ヶ　紀伊國名所図會ニ見ヘタル翠ハ

西坂本ハ和哥山より當山への糸詣合ロ東坂本ハ粉川より糸へ入合ロ　双方とも旅舎有

故ニ順礼のもがく西より入て東へぐると辨理ハ當山より粉川へ三里半へ

西坂本の入口阿弥陀佛の古碑へ　天文二年ヶ彫ハ

東坂本の入口も同一古碑へ是ハ天正十一年ヶ

石手渡　岩出より紀の川へて舟渡し　此所ハ八軒屋より粉川へ直道なり　旅客ハこれを渡る

根来寺へ行者ハ行ハ則ち田井の瀬の渡の川上へ名物のちんとを商ふ名手のちんと

岩手里　古歌多ヶ　岩手驛　若山より行程四里

粉川へ三里半ト云

岩手大宮　岩手の渡の北岸へ有岩手の庄十ヶ村の氏神なり

境内廣く社頭へ境内殺生禁制へ

本社　二座　二部大權現　熟田大明神　両社ともに壮麗なり

末社　春日住吉の二社ハ二部の社の右へ有　拜殿　神楽所　御供所　鐘撞　いずれも社頭へ

八幡　蛭子　大已貴の社ハ熟田社の左へ有

本地堂　本社の右の傍へ有不動明王を安ハ　玉塚　本社の後へ有　熟田氏本社の左へ

四満院ハれと支配ハ　ちに網む故ニ名へり

閼伽井　本地堂の右へ有　稲荷社　閼伽井の後へ有　社司　熟田氏本社の左へ

屋敷へ

例祭　六月七日　九月十六日　十月ハ御火ヶ祭　西度へ又八月廿日の夜丑の刻ニ斎刺ヶ

神事へ甚式ハ神主一人　祇宜一人　木綿つくる大神ヶ持て両社の神躰ヶ二行す

あ〜びて鳥居ヶ出ヶ大ヶ左右ニ立て上ハ下井坂の村境貝の狭間ト上田村の二本松へ

呼ニ各其神ヶ当社敷地の勝示へ渡御のひぐ道へくの家毎に点ヶ灯ヶ消

しむ此夜祈願すれバ必ず霊験へ遠近の男女群集して賑ヶ

敷地のひぐん数万人免滞して蹲踞ヶ眼ヶ祈願ハ

熟田社ハ尾張國より勧請ヶ上古ハ社地の東熟田の森ニ鎮ヶ中古此地ニ移ハ

ぞ二部社ハ覚鍐上人根来寺の伽藍鎮護の為ニ勧請ハ聞ヶ

里老曰往昔文禄年間
根来寺の大塔ハ
強盗ナリて近村
近郷を犯し
騒しる程に
此傍ハ往来の
旅人も絶て白昼と
いへども物ものゝ衆人
恐れとあしるが
終ハ是も刑罰せんとね
今ハ殊更太平の御代とあて
往て脳すべ遷るに煩なし
義詰平生に間断なく街の
やさしき事ひとし
君乃御恩沢仰ぐ下尊むべ

春日神社 中三谷村の街道の北春日山の半腹にあり池田の荘中の産土神なり是ハ根来（すなわち）道筋にして東坂本より西三谷より此地に来る順路なり

本社 四座 祭神大和国春日社に同 若宮 四社の右の端に有 祭神大和若宮に同 神樂所 本社の左傍にあり

末社 竜王 稲荷八尾ホ 二社本社の右の前に有 鳥居額 明恵筆 延壽院 神宮寺なり本尊大日如来 本社の側あり

神木 鳥居の傍にあり 神取池 神木の西にあり 納涼森 森恒内に有明恵上人暑氣とさけて憩ひ給ふ所なり 明恵上人ハ當村金剛寺創建にして住せられしぞ

春日山城堰 春日山の絶頂に杉林の中方四間ばかりの空地あり 根来衆ありしころ太平記に見えしかの城なり云 人馬谷 八郎ヶ峯の東に有牲牛塚と埋むと云

岩田八郎墓 春日山の前弁天山の上にあり延文五年七月岩田八郎政信春日山の城を守り恩地牲川の勢と力戰して討死ハ委しく碑の面に記せり

建初山金剛寺 同村にあり愛染院なり今廃して僅に一宇と存ハ 境内に秀郷此地を領せ故没後供養ハなり銘文詳なり

俵藤太秀郷碑 此碑とかたて

和田城堰 古和田村の傍皮田村の地にあり中三谷より東三谷につゞく夫より古和田村にて粉川道に出て東西南に堀の形のこれり 傳云楠家一族の居城なりしの城 皮田村の古城跡ハ今畑なりて東西南に堀の形のこれり 傳云楠家一族の居城なりしの城 泉州岸和田にあるハ今尚枯骨を堀出ハ事あり 又村中に天守の跡と字せる所もあり

摩尼山延命寺 勢田村にあり則ち粉川街道之本尊地蔵菩薩と安ハ霊験あらたなり

如意山観音寺 街道より右に入長田の庄別所村にあり蓮花院と号ハ俗に長田の観音とのひ石除宝珠院と号ハ 観音に相ハ軒屋に粉川への直道と来る人岩手の渡を越て此門前に出る是より粉川十六丁有

本尊 如意輪観世音 脇檀 左 弥勒菩薩 右 弘法大師

三重塔 本堂の前左傍に有 阿弥陀堂 本堂の左に有 鎮守社 堂の左傍に有 鐘楼 鎮守社の左にあり 当寺の縁起銘文詳なり

居栄松 楼門の内にあり 糸清の道を蓋ひ 楼門 街道より正面に見ゆる岩手なり 粉川に至るの此道なり

補陀洛山粉川寺 粉川村にあり 施音寺と号ハ天台宗

第三番

本尊 千手千眼観世音菩薩 長等身

御位牌堂 本堂の西にあり本尊千手観音と安ハ 邦君御代々の御位牌を納む

六角堂 本堂の東にあり二十三所の観世音と安ハ順礼の札納堂なり

行者堂 本堂の乾上の方にあり若一王子丹生明神 役優婆塞と安ハ

鎮守神社 本堂の後上の方にあり左右に列ハ 祭る末社にあり

阿弥陀堂 本堂の艮の方にあり 十禅院門内にあり

奥薬師 本堂の東 山中にあり

閼伽井 六角堂のところに有

丈六堂 本堂の巽 壇の下に有 地蔵堂 丈六堂の南にあり

鐘楼 本堂の左に有

湯浅櫻 本堂の前右の方にあり 住人藤原宗永康和元年猪熊と云人山中に入て八重桜を見出し云々 傳云 夢の告にありて當寺に寄附ありしとあり 故湯浅と云

茶所 内に中門の

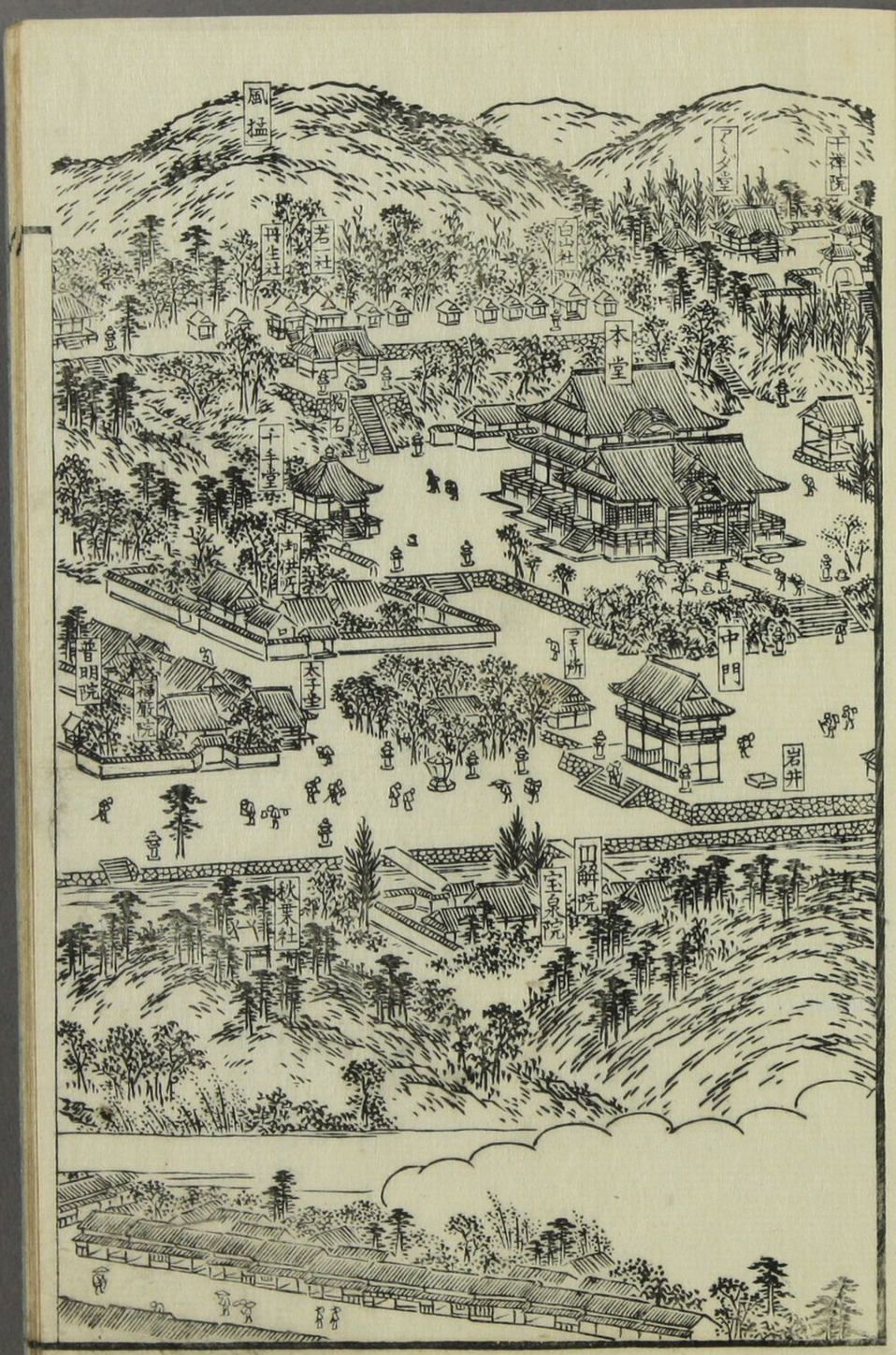
参籠所

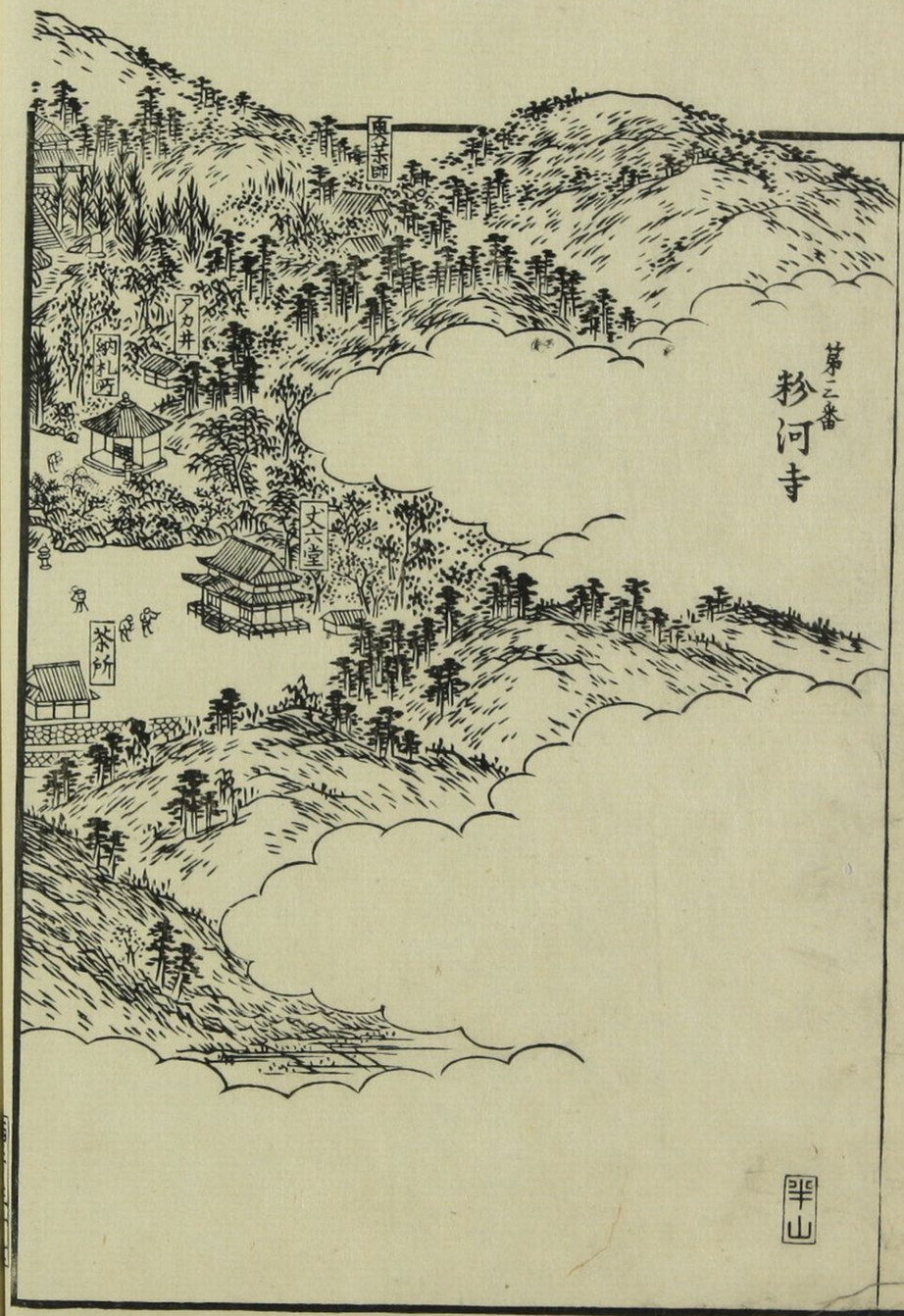
茂掛櫻 花山院茂とかけさせ給ふ

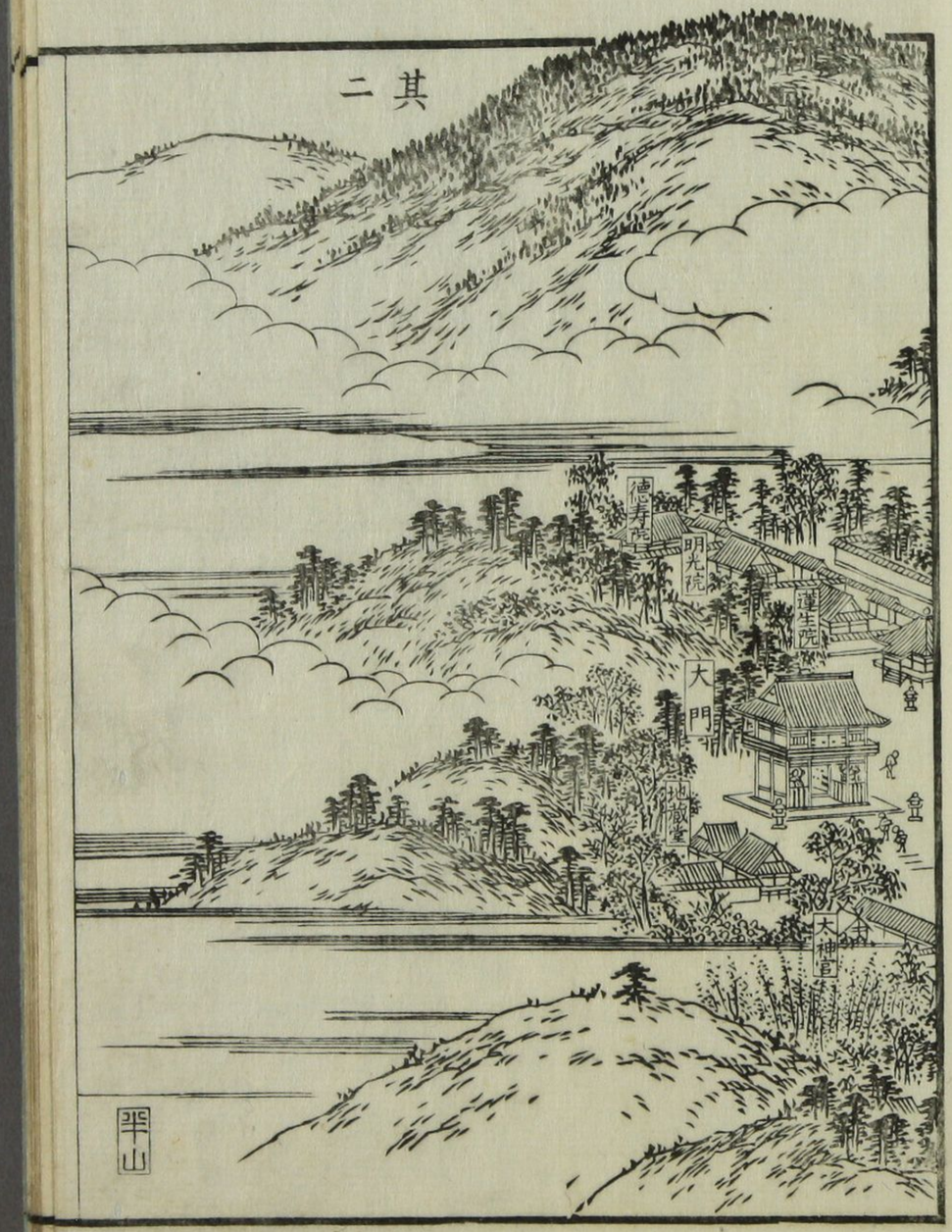
御供所 本堂の坤の方にあり 平日本堂もしくハ鎮守諸社諸堂献備の供物を調進ハ

中門 大門内二丁許にあり東に向て入四天王を安ハ額ハ 蓮葉形敷盤 中門の下に有紫銅と以て作高サ凡五尺 貴人御参籠の時に伏らせ云 亞相老公の御筆風猛山と楷書にて書しめ

上宮太子殿 中門の外坤にあり南面 小社二祠 太子堂の西にあり八幡弁天春日の二社相並ぶ 聖徳皇太子を安ハ 弁財天ハ河内国佐太夫が女をまつる


風猛
アヽシダ堂
千禅院
八老二社
再生社
白山社
本堂
物石
十手堂
御供所
中門
普明院
太子堂
禅厳院
三ヨリ所
岩井
四解院
宝泉院
秋葉社


第二番
粉河寺
風呂所
アカ井
納札所
大六堂
茶所
山門


其二
德寿院
明光院
蓮生院
大門
地蔵堂
大神宮
平山

光仁帝廟
無量光堂
十王祥院
千手
出現池
馬頭
童男堂
御池坊
不動堂
経蔵
イナリ
揚柳井
戎社
円生社

出現池　三社の西にあり十間許の池心四所灵池の一なり　中嶋堂　出現池の中島に有童男行者の像を安ず　二角堂　中島堂の側にあり千手観音を安ず

馬蹄石　出現池の傍にあり童男行者出現の時跡あり　常念佛堂　出現池の東隣る堂中の額ハ亞相老公の御筆又畠山満家の牌を納む銘に奠観寺殿道瑞禅門尊儀　裏書に基国嫡男畠山尾張守満家従五位下管領永享五年九月十九日卒康正二年冬涼持国江血而立ち行ふ又應永廿八年満家燈明料寄附状あり永享三年冒廿日義教将軍参詣の時持国も倍従して御池坊に宿らる　童男堂　出現池の西に隣る童男行者の像を安ず　揚柳井　以て覆ふ九井の一なり

地蔵堂　揚柳の井の西にあり　不動堂　地蔵堂の西北にあり　経蔵羅漢堂　稲荷社　ともに大門の内にあり

大門　本堂まで三丁許南面金剛神を安ず　念佛堂　大門の前にあり善光寺如来を安ず　蛭子社　大門前にあり世傳に下乗札あり

大門橋　大門の前二丁許にあり此流を則ち粉川と水源ハ當寺の後風猛山より出る粉川寺の内を過ぐ大門前にて中津川に合流し粉川の里中を流れて紀の川に入る　黄門公福

當山ハ人皇四十九代光仁天皇寶亀元年大伴孔子古の草創にして天下にしられる霊場なり抑此地ハ北に高城の嶺連り其山足南に延縁して別に一峯を起せると風猛山なり往古ハ林樹蓊鬱として人跡稀なるしゆ禽獣の類い所を得て栖ざるめり一時に近郷に大伴連孔子古といふる武夫あり其子と船主といふ船主ハ鎮守府の軍曹に任じ将軍の旗下に属し奥州にあり孔子古ハ射猟を業として常に風猛山に分入て夜ゐく猪鹿を射る或夜山中に光あり其大さ莖のごとし斯光を現ずること四夜に及びしば孔子古心に思ふやう我年来殺生を楽しみ其罪浅からず然るに此瑞光に逢ふこと宿縁にあらずんば事あらんと忽ちに菩提心起り則ち其光ある所に草庵を結びて尚もなほ佛像を安置せばやと思ひ折ふし甚美しき童男の行者来りて孔子古に一夜の宿をもとめて孔子古ハ是を諾して宿せむるに童男ハ大にうるおび足下何さまれ願ふこのあるとき我助けをせんとて孔子古ハ彼光明の奇瑞とこゝろめ草庵に佛像を安置せばやと思ひ良佛師に逢ばんと空しく時日を送るに行者の曰吾僥倖に佛土に侍ばん望を遂させんとて孔子古ハ數回ゝ我佛を造らんとて志しを一にハ吾身の悪業も滅び并に一切衆生のため又一に我子船主遥に遠く奥州にあり親の身にハ常に安否を苦しみ願ふ安穏に飯らんと祈りこゝ即ち行者と伴ひて先草庵の地に往り童男の曰ふ此庵中にて七日のうちに佛を作り侍べし其間ハかりそめに来りて見さまゝ

もゝれ成就せば此方へゝ告ゑしむべし約し行者ハ草庵に入て戸を閉てり
孔子古ハ宅にかくゝて其言に志てゝ七日のいとゝ精進潔斎して慎ゝ斯て
第八日の曉に至りて門を叩く佛像をゝ成就すと告ぐ孔子古ゝ走せ
出るに人影ゝに見ゝ奇ゝて彼庵に至りて見ゝば行者ハもゝして金色の千手観
音の尊像光明赫奕ゝて立せ給ふ孔子古ハ感涙肝に銘ゝ是ゝ弓矢を
投うて佛法に帰ゝ此尊像に仕へる干茲其頃河内國渋河郡に佐太夫と云長者
ゝ其寵愛の娘ゝも病に沈ゝ医療手を尽せども験もなく歎き悲ゝ佛神を祈
て平愈を待の外臣或日彼童男の行者来て休らゝ佐太夫歎いの余りに一子の
病苦の事を結る童男聞て則ち千手陀羅尼を誦ゝ懇に加持せゝば其病忽ち平愈
せゝ父母が悦びなゝん品ゝ多の衣服財寶を以て布施をもゝ行者ハ固辞く
更に受ゝ給ハ一の著筒或鞘附帯一すゝゝと云と受て帰らんゝ夫婦ハいとゝ思ひそ其住所をゝ童
子の曰く吾ハ紀州那賀郡風市村粉河寺に住りのもゝと答てゝ立去ぬ
佐太夫おもゝ此兒に息を謝せんゝ思い家族浅卒ひゝく許多の布施物浅ゝ

風市村に尋〇行て粉河寺をゝ向ゝに知人もゝれば爲方なくて山中を
此彼と回るゝれば一澗いとゝて東西に流ゝ下りて見るに河水白して粉漿のゝ是ぞ
彼粉河もゝんと曉ゝ尚も流ゝに従て林中を分入るに一宇の草庵ゝ内に
人ゝて戸を閉ゝ其時既に日暮ゝば草庵小人もゝ一宿ゝく夜
明ゝば又尋〇ん物とて庵の戸をひゝく暗ゝ中ゝ此に坐ゝ長途乃労
れを休める迷い歩に疲を出て人ゝる暫ゝ睡ゝる時に奇異や夜半ゝに佛
前の燈盞自然に火を點ゝ室中忽ちに赫ゝ佐太夫ゝ従ゝ人ゝ打もゝ驚
起上ゝて伺ゝ見ゝば千手観音の尊像光を放ちゝ在ます近くゝて拝ゝ
奉れば彼童男に与ゝる品を観音の御手に繋ゝ扨ハ行者と見ゝるハ観音
の化身ゝ有ゝ感嘆恭敬ゝて一家ゝ有ゝ観音に奉仕ゝり又當國
伊都郡渋田村の孀婦大刀自ハ彼草庵の隘陋を嘆ゝ己ゝ家を移ゝて観音の
本堂ゝ郡中名手村の女某ハ己ゝ宅を壊ちて礼堂に施入ゝ斯ゝ精舎の結
構そゝろ霊験日ゝに新ゝて利益を蒙ゝる輩幾千万ゝ数を尽ゝ正暦

二年冬　花山法皇熊野山より御下向の次に當寺に通夜しのひ
後白河法皇當寺に藏まれる三尺の尊像浅移して京都世三間堂の側小千手
堂の中尊とし奉り摂関家も亦信伸浅うして永義二年に八宇治殿永保元年
に八京極殿康治二年に八知足院殿元久に八松殿先躅を追ひ系靖しのひ　将軍家
に八應永廿八年足利義持公永享三年に八足利義教公あゞ御臺所と共に
香華を取り都鄙の士庶群集八しても更もり堂塔も其數すくなく五百有余宇に
及ひしを天正年中豊太閤の大挙に至りて皆一時の焦土となりしもん慶長
以後天下治平に属して廢を起し絶を継ぎ消古に復する事を得たり後
又屢自火の災ありしかども再建の功速にして輪奐の美古に加へ実に盛なる

霊場〳〵〳〵　名所図會大意

坊舎二十二箇院　律院一寺　山内に列ル院号略す

四所霊地　第一光明地　本堂の地にして補陀の観音大智光明を放ち霊場を示しの所

第二踞木地　本堂の東南茂林の地なり孔子古光明を見て巧中しの所

第三 出現地 本堂の西南に観音童男の行者と化して現れの人地
寺の法花堂とは一ツ花の乃至歳世を〻〻年 同
第四 宝鐸地 本堂の東北の傍今の十禪院の地と昔此地の土中に宝鐸一口を得る地
その音に法の筵をまきゆのむ〻光を放むし乃ち出る 同

風猛山 當寺の後の山とて粉河の流を此山中に出る

玉葉 花衣かざしたる山ぢかくなれば桜咲ぬる身成ぬる

縁起 一巻 宝亀元年の草創の事と記し貞観年中に寿永年中までの霊験三十三ケ條と書し古寫本の奥書に應永十九年十月十三日依法水院僧都長筭所望於二條坊門室町扇屋書寫本勘解由小路入道義將御記云云に尋常等院の縁起と異にして古書に徴する事多く世に珍らしき縁起なり

詠哥 父母のあるかも知き粉川ち佛乃ちろひ彩の身やと

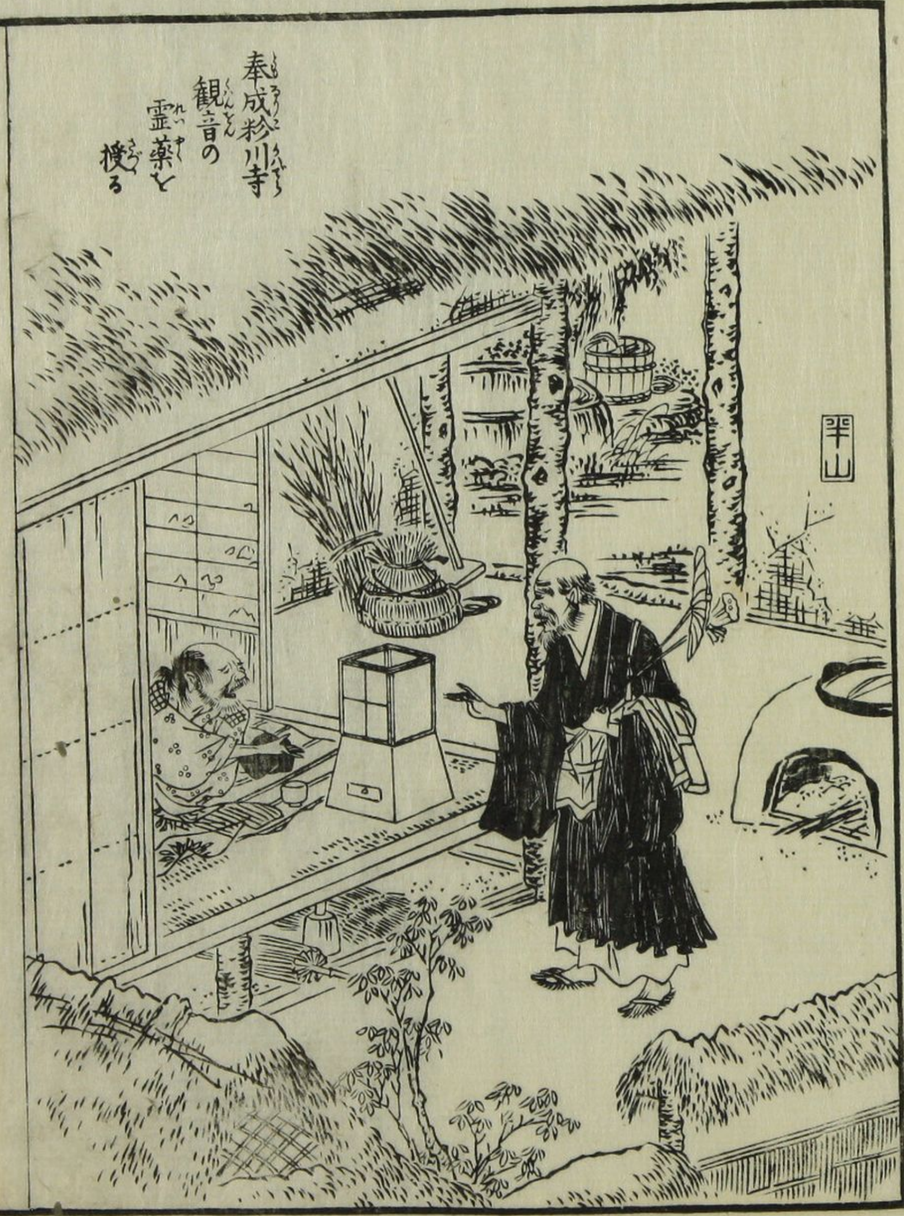
按に父母の慈悲の深き事須弥山も及ばず滄海も尚浅し云れば古哥も人の親ぢんハ国に居ても子とも乃に まひぬるるト詠ぜ何者の人か子と憐まざらんや是とても恵も深く徳も観音の利益も皆父母の子成慈むがごと普門品云應諸方所弘誓深如海云云則下の句の佛の誓ひしるに思ひ合はじ法華経云こ界を中衆生悉吾子也ト説り

或書云往古駿河國富士山の麓に一人の貧民ありて父ハ死て母一人ありこの民

頗る不孝の者にて老母を疎び或日母に向ひて言ふこの山の上に知識来りたまひて法を説聞せ男女を教化しまた母も聴聞しのんやと平生に異りて誠に母ハ剛て大に悦び我法話を聴く〻思ふに事渇して水を求むるごとし然れども行歩心に任せ不自由なれども為方なしとて息子にかづけ余思ひのごとく我肩にかつぎて心よげに背に負ひ草木繁りて道もなき山中を足にまかせて登り行人倫なくて叢に老母を下し母に対ひ貴き知識の在ハ偽りなれ貧しくて粮に事難ければ此山に捨まらんせん謀畧なり必ず恨ミなして母を捨て帰らんと登り来る道を尋ぬ草木繁り道なれば甚所〻に迷ひ彼と徊むと老母ハ泣く聲を挙て汝麓へ下るに木の枝を折る方下るべし我をば斯ひらんと思い泣ぬ肩の上にて木〻の枝をもうくるぞ夫と印に乃ちと言を聞て驚嘆して無頼の不孝者も忽ち善に翻り老母の足を五頭に注け母をとりて大悪人牛割にも思ひたまへかつて道の標辺とし御恵を何の世にハ報ひつと此人の御慈悲に不孝の罪滅絶し再び家に帰りて背をさ

向け踞る老母ハ喜ひの涙を流し肩にかゝりて再び家に飯を乞ひて夫婦して子ハ日来
寝り數回孝養を尽し世を隠さもれ大孝子とうたゝぞ其意を一人の哥に
奥山に枝折しをる八雲ぞ我身成けり孝子の社会　されば
親の慈悲心斯のごと況や衆生の実の親なる佛の誓に抑つてを仰ぐ尊むべし
撰集抄云　宇治殿の御時紀州那賀郡ゆゝゝ糠尾田もとゝ所に紀四郎奉成と云
農夫侍り下まるきうの者ハ差ゆゝゝ朝夕の煙を立る針ひけをして後世の事
ひたすらけざんめると奉成ものゝ先世の宿善や日と経て熟しもん粉川の
観音と深く信じ奉て賤が山田とかゝるも観音の御名を拝園の秉とゝるも
此菩薩に心とかゝ奉まて寶号急る事侍ゝ余りをゝ病のゝれぬ事して五十
有余の春の暮より病の床にうして春を夏過て九月ゝゝ成ゝ日を
経るまゝに腹むしゝゝゆゝをして苦しき事たゝて言ゝさゝ侍らざりけ
其時奉成思ふやゝ我観音となるゝ奉るゝ都に登りゝ時一人不成二世願
我墮虚妄罪過中不還本覚拾大悲して二世の求願を救ひゝ生老病死苦以

漸悉令滅と説まて病をやめさせのゝ説法の侍りしを聞きて今ゝ心に
ゝゝ頼ゝ奉ると誓ひと発しそこ二十年の間毎日五万遍寶号を唱奉つるを
ひく観音八妻ゝ物ゝ海せゝ八分て粉川に月詣をする事又是急ゝゝされば日れ定
業の病を受て侍ゝも御誓ひの実ゝゝゝ今度の命を生のゝるべき
緩令のちの限をゝて身をゝ代受苦の御志をまゝゝ思程まで
苦ひ侍るゝ速に苦患を救ひまゝして行者の心を正念にゝゝ心に深く祈念
侍るゝ其夜の夢に粉川の観音ゝゝと名乗ゝて貴げなる僧のまゝかゝ
女が左申所ゝゝゝれ有と思ひて薬をもちて来まゝ早く是を呑べしと
小く圓さゝる物を二つのゝせられバ畏まつゝ給て二つをゝ取ゝ
しゝく傍に落しぬ求むゝまゝ夢さめてゝゝゝ苦患ゝて腹の大ひに
いゝゝゝゝも減を軽く涼しゝゝ心地ゝたゝゝ方ゝ傍に休ゝ
妻子を起して如此ゝゝゝ大に悦ひて取落しを一ツの薬を求ゝゝゝ
小比連実ゝ苦しゝゝ流涕ハ物のかずゝゝゝゝ是を錦の袋に縫ゝみて



守ることうけてゝ去程に七日と経ていづれも給ゝて明て拜ゝ侍るに此蓮の
実二つくゝれて中ゝにちのさゝ有ゝ青蓮花あひ出さう不思儀に覚へく
人ゝ此ゝと結る程に宇治殿聞召て奉成と召まそゝぶゝ御尋ありに
始めゝの事と委く申入侍るに殿きとめゝ随喜の御候られいさせ給ひ
御結縁もいつゝまでゝ拜ゝ奉ゝせのふべゝて又簾中に召入られて御覧ぜれ
是とゞ速に我に得さんべゝて取奉らせのひて奉成にハ彼所に一期すぐべきゝど
子ゝ孫ゝせゝて田畑たゝせのひてう扨彼蓮花とゞ平等院の寶蔵に竜
させのひてう此奉成ハ病の愈るけゝふいうゝ田とのうて一期たつゝに侍りれば
信仰いとく深ゝとぞ羨いるいれ貴ゝぞ侍る現世の得益すゝに新ゝなう後世
いゝゝゝぶんや恵心の僧都の蓮花おのん事有有に侍るに是ハたゝちに記事
ハいゝゝゝぶも扨も二とゞのゝ今一とゞ残ゝて利益の名と廣く天の下おりゝに記人ゝ信と
ひき寄くの縁と結ゞせのひん有難ゝぞ覚へ侍る扨も此奉成ハ何れの所に生く
観音の御いうれひと深く蒙ゝん返いゝくもゆゝく侍る

杉川霊験記に大同小異
あるゝに畧れ

鎮守例祭

六月十八日鳥井坂の御旅所に神輿渡御あり行列の光景もつとも壯麗なり
殊更粉川の町〻にて編笠うる車樂出て賑ひ郡中小もつぶ〻

御旅所

粉河南の入口にあり鎮守冊生大明神の御旅所にて渡御あり昔土の地ホ
大鳥居あり地名を鳥居坂といふ

粉河町

伊都郡那賀郡両郡の中央にあり煙る土地廣し南方に高野山に通ず紀川に添ひて
上下運漕の便あり其上霊場の観音あり遠近の詣人可断あれども
人家漸く建つらん商賈市鄽軒を連ね終日交易つねに繁栄辺に双び色名産に粉川酢あり

第一に粉川團扇粉川ちんやホ世に名高し

猿岡山

粉川寺の境内にあり藤堂氏居城の跡あり〻〻
城跡東西一丁南北四十間許

天照皇太神宮

粉川大門の辺にあり補の大拔藪茂せり別當を大神寺と号ス
いまく猿岡山の鎮守にして今北村の氏神〻ス

鎌垣行宮趾

粉河村の東畑の中にあり今少しの形を存ス人王四十八代称徳天皇天平神護元年冬
十月紀伊國に行幸の時此宮にやどせり續日本紀に見へたり

御所芝

同村行宮の東二丁ばかりにあり傳云花山法皇熊野御幸の時粉川寺に参詣あり
其砌の假宮の跡なり或曰後白河法皇の頓宮なりと

祇王舞田

行宮の跡の北田地の字にあり又字の内立阿弥の字のこれあり傳云平相国清盛入道の寵愛
ときめき祇王に下り親の〻〻にて住めり其親罪ありて囚れとなりぬ
〻〻ぞ又字を守るものに親に對面のことをあひ〻〻出さん林の何某の後裔今尚長田の中村に嶋村ホ
下〻に事祇王〻〻繰曲に見へたり其〻〻にあり祇王此地
あり〻〻又中村に林氏の支配の小堂あり堂の傍に祇王祇女の墓〻〻碑あり

玉垣勾頓宮

鎌垣の行宮〻〻十丁ばかり東北井田村の南にあり中古其地に寺を立て玉垣寺と
人王四十五代聖武天皇神亀元年冬十月紀伊國に行幸の時此宮にやどせり
今玉垣庵と小庵あり

○右鎌垣の行宮の古跡〻〻此地にて六街道〻〻ぐれも廻の道と粉川の町〻〻高野辻迫直道八半リ

高野辻

粉川の町〻〻半里行て
高野村〻〻にあり此村
中に岐路あり此の方
行望は此の方なり
もし右の方なる
いつる傍に立ち
此辻と傍に
辻と号け此石の
ひくしるべ
東路の
為とぞ
ものゝ

高野辻　粉川の町より半里ばかり東野村と云在中を街道二そばに分る右へ高野山へ登る左へ
槙尾山へ登る道あり高野街道の辻なるを以て斯号る

○是より高野山へ廻り余後槙尾山へ出るべし

高野辻　右へ行て紀の川へ出る是を渡る麻生津宿茶屋麻生津嶺上り北八丁許右
麻生津の渡しと云高野辻より半里　麻生津　麻生津の渡しより二里　宿屋茶屋あり　花坂　是より大門まで五十丁一丁毎に三石あり七八丁登りて
又麻生津より天野明神へ廻りて矢立の茶屋へ出る道あり　大門　高野山内へ食物を売家邑
麻生津より天野へ二里天野より矢立へ五十八丁　坊着ぜざる人へ食物用意有
高野山伽藍の結構境内の名所ホ紀伊國名所圖會第二編に詳なり図しるす

其盛太多と知べし

不動坂　下り坂道嶮しく人家邑　紙屋町　左へ行バ京大坂への道通
紙屋の宿まで五十町

九度村　真田幸村閑居の跡あり九度山地蔵尊　慈尊院　弘法大師御母公の御朝所
村の南に霊験あらたなる地蔵尊と云　慈尊院へ三里　推出村
村の南に霊験あらたなる地蔵尊と云
次に大野村を経て大畑出る凡て慈尊院より大畑まで二里　大畑宿伏所　大畑峠
紀伊河内の國界なり是より人家邑五十丁を経て一つ家あり是より　瀧畑　瀧の畑村の間至て長し
少し行て光瀧寺槙尾山奥院へ入て夫より瀧畑迄二里　中程より左へ入て槙尾
山へ入る山路と云へども難所なり瀧の畑凡三十丁余あり凡拾八丁
高野廻り十二里と云　すぐに道を左へ紀
左へ紀

名手新蔵人城堀　名手の庄市場村より高野辻より此地まで半里
新蔵人畠山家の麾下にして永禄年間に戦死し當村其子孫尚残りと云

宇野若狭守城堀　右同村民の山上にあり若狭守
天延年間の人にして高野攻に名あり

名手神社　名手の庄穴伏村にあり名手大明神と称し押生明神八幡大神狩場明神を祭りて
社殿多く建並び中央に特槙明神の景向あり境内廣し名手の庄十ヶ村の産土神なり

穴伏川　穴伏村の出口にあり又静川とも或は志津川とも云永源高城山に國嶽より出て伊都郡
四郷谷を経て穴伏川にて紀の川へ入る那賀郡伊都郡両郡の界なり
此川を越て直に行バ大和國壺坂へ出る槙尾山へ入る川の此方の岸に添て左へ此川筋を
つ度もまたぐ行く是を四十八瀬と云なり槙尾山へ出る
又此穴伏の川岸より向へを眺望すれば妹山脊山舟岡山麻生津峠飯盛山亀門山を見て
前に八紀の川の流れ漲て流て風景絶勝

妹背山　妹山八紀の川の向ひにあり背山村より川を隔て相對せり
一説に云せ山八大和國なり
妹背川　右妹背の山の中を流れ出る川を間を隔て流れ東へ西へ妹山の南に背山八北にあり
をもて紀の川へ流れ

舟岡山　妹山背山の中間大川の中にある小島なり甚形舟に似るを以て名とす穴伏川の辺
島の中に弁天の社あり

四十八瀬　右の川せ山街道に沿て唯穴伏の川岸より向を眺望する山なり
穴伏村より廣口村まで凡二里余川の中にて水あるを所とあるべしあるひ流をあるる所を
あるべし雨中に山の方に道あるべしと思へども不分明にして行て水を高き時八往来しがた
廣口の手前に上村にあるに摂待の茶所あり去寿庵と号ス尼僧住せり是より宮前へ十丁
大宮四社明神社　本社の左傍に楽師堂あり社前に鐘楼あり宮寺を真言寺と云
四郷の庄の生土神にして社殿の結構備はれり
石階の下を宮の前と号く穴伏村より此所まで凡二里ばかり

十二勢墳　右同村ニ有り相傳文治の頃平家の殘黨此山中ニ隱キヽと鎌倉ニ聞て討手の武士と向ふ戰ひ終ニ討死せしと其ヽ埋み塚あるなり

同村宮の前ニ有り凡北ヘ行ば坂路ニ成り是より峠まで五十丁凡五丁目毎ニ石の地藏尊を

ゑる此峠を七越峠と号し宿山と二國峠の間ニ

萩堂　平村の枝郷大久保村ニ有り此所宮の前ニ四十丁ばかり有り八十八丁目ニ有り

常福寺と号し本尊十一面觀世音と安し古佛なり行基の作ニして此堂を萩の堂と

号ス堂柱萩の木を用ひ造ル飛鳥の頃の造る所と爲ス

形並ニ通の堂ニハ異ニして古代事千載以上の物ニ見ゆ後の傍ニ明神の小祠あり

○右大久保村の手前ニ平付ニ有り此所ニ泉州牛滝山ヘ道あり又河州光滝寺ヘの道も有り何れも

山路ニまぎれの尾道と稽見越ニ成り

順禮足休觀音　七越峠北八丁目ニ有り標寺の茶所ニ安し左ニ弘法大師右ニ不動明王と安し

平村ニ此所まで人家あり又是より槙尾山までも人家もすくて食物用意すべし

七越峠　凡葛城の峯つゞき海士郡加太の浦ニ成て泉州ヘ越る道なり至て七道あり故ニ

七越の峠と号し此辺すべて修驗道かつ〻修行の行場多し

天王池行場　峠の林中ニ有り標の岩　七大金剛童子祠　天王池の傍ニ有り

三國嶽行所　峠より五丁許通の右傍ニ此山乾方ハ泉州の地艮方ハ河州坤方より張り出し

紀州の地也て二国の堺り聳る山上の眺望ニ見る槙尾山四十五丁ニ五丁目毎ニ石の地藏尊を建札あり

聖護院宮御行所三國嶽ト志るす

鈡池行所　同住来の左傍ニ有り　雨壺行所　鈡池ニ同ド　御行所の建札右ニ同ド

○槙尾山まで四十五丁余其中凡廿五丁許ハ道至て細く山上ニ成て平地ニて歩むに労し

往来の人稀なり後廿丁ばかりニ至て六甚だ嶮岨なる熊野路の難所ニ異なる事なし

山家　とざれや桜ぞ嶺と紙りバすぐくやる山路乃こゝろ　西行

和泉

和泉國ハ下筥二郡ニして地勢山と帯海とを抱ク國中廣く平原多く舊此國ハ河内ニ屬シ人王四十四代元正天皇靈亀元年四月河内国大鳥和泉日根の二郡と割て和泉國と せ 続日本紀に見えたり故に暑寒河内に同じ以上二郡乃昔莫清海畔あり其和泉と名る事ハ泉州志曰神功皇后新羅を征し給ふ年地中ふ波浪の聲ありて須臾に飛泉湧出し其流の味ひ甘露のごと故に其地を泉郡と名今の國府の清水ハ六是欲多し泉に和字を加る事ハ玉勝間に云其郷の府中村に今も和泉の井とゝなる清水ありて泉井上神社あり延喜式に見ゆ然るに和泉志ふ此和泉の井と拳て其水清く且甘くしてゝ泉せるとして思ふに此清水上代よりいと清くて甘ゝし故に泉と名づけて和泉と書るを其里人あゝ唯つゝしみ言做るを弘めて名高ク水もれば京人ゝ泉と言ふ言ふて郡の名も國の名もあれると惣て國郡の名二字と用ふる事ハ故ふ舊のごゝ和泉と書てゝ言るあゝと云さんば和泉ハ和泉ハ畧語なるゝ

日本後紀云淳和天皇天長二年以摂津國江南四郡東生西生住吉百濟隷和泉國而同年復還附摂州云云

福王山光龍寺

龍畑村にあり此地ハ河内国と摂尾山の奥院と云天台宗之粉川より高野山迄ハ摂尾に出れば此地街道と檜原越と来れば摂尾山より別に糸結すべ又平村より三ツ出る道長三尺行滿上人の作 脇士左 千手観音 右 役行者を安ス

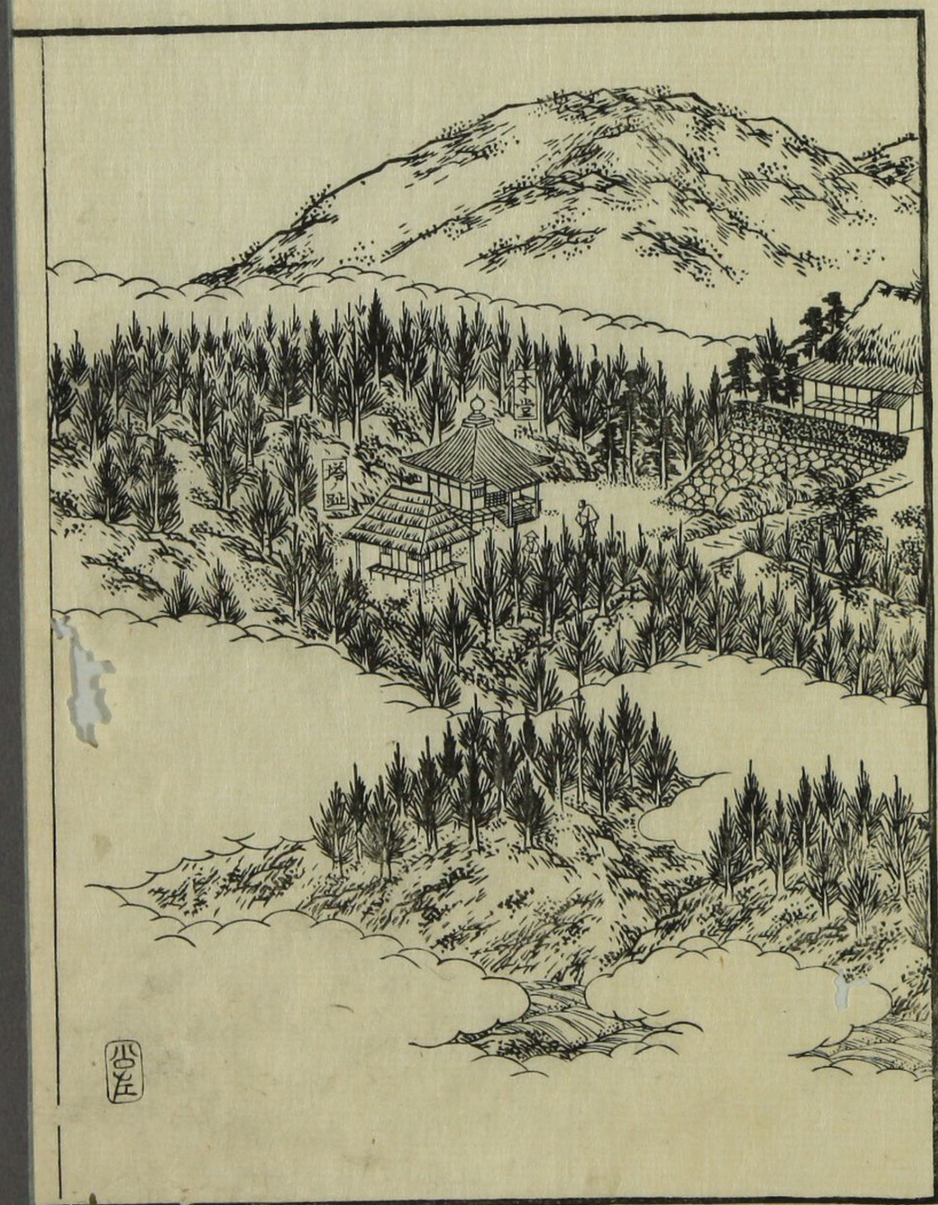
本尊 不動明王

子寶塔 五智如来を安ス今廢して一重ノ塔のみ存し杉皮を以て屋上を覆ふ 寺僧云 此宝塔ハ波君の御建立也

炭燒不動尊 僧坊の向ふにあり 長八尺 蘇木作 弘法大師作

夫當山ハ人皇三十代欽明帝勅願の寶場にして開山行滿和上ハ播州賀古郡に産て泉州賀補山に来て初て老翁に見て當峯の霊場なるを知り光の龍となり来て此道場を開ク自ら背負来り千手観音の尊像又自ら彫刻の不動乃霊像を本堂に安置し今後摂尾山と草創の化縁をゝ盡て入滅の御廟當山に現在せり又加補山の翁再び當山に来て滅を取廟を開山に並ぶ其後大師の師勤操僧正公叡の又廟を開山に並ぶ今之聖の廟に称するの是也其後役小角葛城修行の日當山に遊化四十八所の龍四十八所の岩窟を開顕の所これ當山ハ古佛来現の宝場古德所住の霊地にして弘法大師も此に住し且勤操僧正も岩淵に當寺兼住職し又弘法入師彫刻の御長八尺の不動の尊像ハ別院聖坊の本堂に安置ス世人炭焼不動と

光瀧寺
槙尾寺奥院
晩鐘の響き
中々面白


本堂
塔址

唱へ甚所以天慶二癸卯春二月當寺の住職帝操大僧都に白炭を焼秘術成不
動明王奇異を授けの給へり然に近来世に茶楽に用ひる白炭を焼て名産と世に光れ龍
炭と号る後白河院根来寺臨幸の日當山に行幸ありの給ひ一首の和哥を詠じの給
あとを白く見くなる今は炭竈たちそ寄ぬ物のかの
又智證大師来端の日出を白る貴哉當山為形似唐台嶺清寂等就鳥峯く
鑽りの給ひ則山口の鳥居に額を掛の給ひ其頌曰古佛来現地菩薩会暁成等正覚場
讓端天善神　其後梅尾明恵上人紀州石垣の里に住の給ひ時一夏九旬の間来つて修
行りの給ひ其時石華と云る物を持来て當山に附置の給ひ九條時頼入道當山に来遊の時
去る友の限り忘れて梯を伝へ浮世ならぬ山を
又根来寺の真敬大師登山修行の時後白河法皇の請に つて灌頂曼荼羅を建立
法皇を始め奉て大衆に授く其外越智山の桑澄大徳寶憧仙人日蔵上人実恵長者
真雅僧正聖寶僧正等何も来臨の給ひ跡を今に残せり又後醍醐帝皇居の給ひ
一時山に護國王山の額を掲の給帝自ら菊の御紋を賜ひ今に至つて光の瀧の一菊

を賜ひ倣て當山に用ひ来れり其後大塔宮護良親王潜びて住せの給ひ時御願
成就院の額を賜ひ並に御祈持栗田口藤馬を亟則國の作の寶釵一振を納め一首の和
哥を詠の給
時と云く法花焼かげに光乃滝ほ流れ石に添
亦足利尊氏軍場に願文を添へ長刀一振寄附せる又殿野法印良忠宮に
拝領の陣扇子楠正成宮献上の硯筥又正成年来讀誦の法花一部子息帯刀正
行父の菩提の為に當山に奉納せる又古の天子將軍家より綸旨院宣御教書
等數通ありて有と云ふ事の繁に依て是を略す　寺記大畧

光瀧　本堂より四丁許奥に行て高さ凡五丈許一名光明の瀧と云ふ此余山奥に竜神多住の
名山と云ふ又三鈷の松福塚感德窟薬師窟釈迦尾大黒石亀石風吹森天狗屋敷
炭竈と云て焼て白炭と製し蹲踞と搖て花木鳥獣の如くなる中所に炭竈有
中所に炭竈有
白炭や　焼ぬもの乃　寄ぬ枝　古和

○是より模尾山に至る事凡二十丁許山径なれども難所あり

西國三十三所名所図會巻之二終